

兵庫県芦屋市

月若遺跡発掘調査報告書

第68・69・70地点

—都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅲ—

2004

芦屋市

芦屋市教育委員会

兵庫県芦屋市

月若遺跡発掘調査報告書

第68・69・70地点

－都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅲ－

2004

芦屋市

芦屋市教育委員会

序

阪神・淡路大震災復興事業である都市計画道路山手幹線街路築造工事は、今年で4年目を迎えております。この事業に伴う埋蔵文化財調査も、神戸市教育委員会のご努力により、順調に進んでいます。

今回報告いたします月若遺跡は、寺田遺跡とならんで芦屋川以西において中心をなす集落遺跡の1つです。調査結果によりますと、弥生時代後期の遺構をはじめ、飛鳥時代の土坑、中世の掘立柱建物群とその建物群を取り囲む可能性が高い堀と推定される遺構など、各時代にわたる多くの遺構・遺物が確認されました。これらの調査成果は、今後この地域の歴史研究に大いに役立つものと考えられます。

暑い日も、寒い日も発掘現場で調査に従事されました方々に感謝を申し上げますとともに、常にご指導いただきました兵庫県教育委員会の関係者、芦屋市建設部街路課の皆さんにもあらためてお礼申し上げます。

平成16年3月31日

芦屋市教育長 藤 原 周 三

例 言

1. 本書は、芦屋市月若町66番7号（月若遺跡第68地点）、月若町66番2号（月若遺跡第69地点）、月若町69番4号・70番（月若遺跡第70地点）において実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は都市計画道路山手幹線街路事業に伴うもので、神戸市が芦屋市と間に委託に関する協定書を締結して実施したものである。

発掘調査に当たっては芦屋市教育委員会を調査主体とし、神戸市教育委員会を調査機関とした。現地調査に関しては、財団法人神戸市体育協会が神戸市からの委託を受けて実施した。発掘調査組織については、本文（第1章第1節（3））に記した。

発掘調査は、月若遺跡第68地点が平成14年6月3日～平成14年6月14日まで、月若遺跡第69地点が平成14年6月14日～平成14年7月26日（6月19日～7月1日まで中断）、月若遺跡第70地点が平成14年7月29日～平成14年10月29日までの間実施した。

調査実施面積については、月若遺跡第68地点が122㎡、月若遺跡第69地点が152㎡、月若遺跡第70地点が540㎡である。
3. 本書は神戸市教育委員会学芸員 前田佳久と石島三和が遺構および出土土器について、中村大介が金属製出土品について分担して執筆した。
4. 発掘調査における遺構写真は神戸市教育委員会学芸員 丸山 潔と前田が撮影した。遺物写真は杉本和樹氏に撮影作業を委託して撮影した。
5. 月若遺跡第70地点から出土した柱材の樹種同定は、株式会社パレオ・ラボに分析業務を委託した。
6. 本書で使用した方位・座標は平面直角座標系第Ⅴ系（日本測地系）である。標高は、東京湾平均海水準（T.P.）で表示している。また、図中で使用した方位は座標北を示している。
7. 遺構・遺物の図面、写真および出土遺物は、報告書刊行後芦屋市教育委員会に移管する。
8. 現地調査については、兵庫県教育委員会ならびに芦屋市教育委員会の指導・助言を得て実施した。また、芦屋市建設部街路課の協力を得た。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(3) 発掘調査組織	2
(2) 発掘調査の経過	1
第2節 遺跡の立地と歴史的環境	4
(1) 遺跡の地理的環境	4
(2) 歴史的環境	4
第2章 月若遺跡第68地点の調査	7
第1節 調査の概要	7
(1) 調査の方法	7
(2) 基本層序	7
第2節 遺構と遺物	9
(1) 溝状遺構	9
(3) 落ち込み	10
(2) ピット	9
(4) 遺物	10
第3節 小結	10
第3章 月若遺跡第69地点の調査	11
第1節 調査の概要	11
(1) 調査の方法	11
(2) 基本層序	11
第2節 第3遺構面	13
(1) 土坑	13
(2) 谷状落ち込み	14
第3節 第2遺構面	15
(1) 河道	15
(2) 溝	15
(3) 落ち込み	15
第4節 第1遺構面	16
(1) 土坑	16
(2) 落ち込み	16

第5節 近世遺構	17		
(1) 石積み遺構	17	(2) 石組暗渠	18
第6節 小結	18		
第7節 第69地点出土の遺物	19		
(1) 第3遺構面出土の土器	19	(2) 第2遺構面出土の土器	22
(3) 土器以外の出土遺物	23	(4) 金属製品	25
第4章 月若遺跡第70地点の調査	28		
第1節 調査の概要	28		
(1) 調査の方法	28	(2) 基本層序	28
第2節 第5遺構面	30		
第3節 第4遺構面	31		
第4節 第3遺構面	32		
第5節 第2遺構面	33		
(1) 溝	33	(2) 落ち込み	34
(3) 土坑	34	(4) ビット	34
第6節 第1遺構面	35		
(1) 掘立柱建物	36	(2) 土坑	38
(3) 落ち込み	38	(4) 堀状遺構	38
第7節 小結	39		
第8節 第70地点出土の遺物	40		
(1) 第2遺構面出土の土器	40	(2) 第2包含層出土の土器	42
(3) 第1遺構面出土の土器	43	(4) 第1包含層出土の土器	48
(5) 土器土器以外の出.....	51	(6) 金属製品	52
別編 月若遺跡第70地点出土柱材の樹種	三村昌史 (パレオ・ラボ)	54	
第5章 まとめ	55		

挿図目次

fig. 1	芦屋市月若遺跡 位置図	4	fig.25	調査区南・西壁土層断面図	29
fig. 2	月若遺跡主要調査地点図	5	fig.26	第5遺構面平面図	30
fig. 3	調査区地区割り図	7	fig.27	第4遺構面平面図	31
fig. 4	調査区基本層序柱状模式図	7	fig.28	第3遺構面平面図	32
fig. 5	調査区南・西壁土層断面図	8	fig.29	第2遺構面平面図	33
fig. 6	遺構平面図	9	fig.30	S X 203平面・断面図	34
fig. 7	S X 101平面・断面図	10	fig.31	第1遺構面平面図	35
fig. 8	調査区地区割り図	11	fig.32	S B 101平面・断面図	36
fig. 9	調査区基本層序柱状模式図	11	fig.33	S B 102平面・断面図	37
fig.10	調査区北・西壁土層断面図	12	fig.34	S B 103平面・断面図	37
fig.11	第3遺構面平面図	13	fig.35	S B 104平面・断面図	38
fig.12	第3遺構面出土土器群 平・断面図	14	fig.36	S K 101平面・断面図	39
fig.13	第2遺構面平面図	15	fig.37	S K 102平面・断面図	39
fig.14	第1遺構面平面図	16	fig.38	第70地点第2遺構面出土 土器実測図	41
fig.15	近世遺構面平面図	17	fig.39	第70地点第9層出土 土器実測図	43
fig.16	第69地点谷状落ち込み出土実測図	21	fig.40	第70地点SK101出土 土器実測図	44
fig.17	第69地点第2遺構面出土土器 実測図	22	fig.41	第70地点第1遺構面 掘立柱建物・ピット出土 土器実測図	44
fig.18	第69地点出土土製品 実測図	23	fig.42	第70地点第1遺構面遺構出土 土器実測図	46
fig.19	第69地点出土石器・石製品実測図	24	fig.43	第70地点第8層出土 土器実測図	49
fig.20	出土金属製品実測図	26	fig.44	第70地点第8出土 土製品・石器実測図	51
fig.23	調査区地区割り図	28	fig.45	出土金属製品実測図	52
fig.24	調査区基本層序柱状模式図 (S=1/100)	28			

表目次

表1	出土鉄釘計測表	26
表2	出土鉄釘計測表	32
表3	樹種同定結果	54

挿図写真目次

fig.21	出土金属製品	27
fig.22	同上X線透過像	27
fig.46	出土金属製品	53
fig.47	同左X線透過像	53
fig.48	SP219・231出土 柱材	53
fig.49	第70地点出土柱根・材組織の光学顕微鏡写真	54

挿図目次

月若遺跡第68地点

写真図版1	月若遺跡遠景（北から） 月若遺跡遠景（南から）	写真図版2	I区全景（東から） II区全景（西から）I区西壁土層（東から）
-------	----------------------------	-------	------------------------------------

月若遺跡第69地点

写真図版3	I区第3遺構面全景（東から） I区第3遺構面全景（北から）	写真図版7	SX201出土土器 谷埋土内出土土器
写真図版4	I区第3遺構面土器群I・II出土状況（北から） I区第3遺構面土器群II出土状況（北から） I区第3遺構面土器群III出土状況（東から）	写真図版8	谷埋土内出土土器 包含層出土双孔円盤 石皿 包含層出土土製円盤 包含層出土土鉢 包含層出土土製勾玉 包含層出土土鉄 第1遺構面 遺構出土土器 谷埋土内出土土器
写真図版5	I区第2遺構面全景（南東から） I区第2遺構面全景（北から） II区第2遺構面全景（西から）	写真図版9	
写真図版6	I区第1遺構面全景（東から） I区第1遺構面全景（北から） I区第1遺構面全景（東から）		

月若遺跡第70地点

写真図版10	I区第5遺構面（西地区）全景（北西から） II区第5遺構面全景（南から） III区第5遺構面（西地区）全景（北から）	写真図版23	SX203出土土器 第2包含層出土土器
写真図版11	I区第4遺構面（西地区）全景（北西から） II区第4遺構面全景（南から） III区第4遺構面（西地区）全景（北から）	写真図版24	SK101出土土器 SD102出土土器 SX102出土土器 SD105出土土器
写真図版12	I区第3遺構面全景（南西から） II区第3遺構面全景（南から） III区第3遺構面全景（北東から） SD301（南から） 第2遺構面空中写真	写真図版25	SX104出土土器 SP165出土土器 第1包含層出土土器 SB103P1出土土器 SB105出土土器 SB155出土土器 第1包含層出土土器 第1包含層出土土器 包含層出土門面硯 石鉄 包含層出土磁石 土鉢
写真図版13		写真図版26	SK101出土土器 掘立柱建物・ビット出土土器 SD102・105出土土器
写真図版14	I区第2遺構面全景（南から） I区第2遺構面全景（南西から）	写真図版27	SX103出土土器 SX104出土土器 第2遺構面遺構出土土器 鉄製品
写真図版15	II区第2遺構面全景（南から） II区第2遺構面全景（南東から）	写真図版28	第1包含層出土土器 第1包含層出土土器
写真図版16	III区第2遺構面全景（北から） III区第2遺構面全景（北東から）		
写真図版17	SD201（南西から）SX203（北東から）		
写真図版18	第1遺構面空中写真		
写真図版19	I区第1遺構面全景（北西から） I区第1遺構面全景（南から）		
写真図版20	II区第1遺構面全景（南東から） III区第1遺構面全景（北から）		
写真図版21	SB101（南東から） SB102・130（西から） SB104（南から）		
写真図版22	SK101（南東から） SD101・102（南から） SX102（南西から）		

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

都市計画道路山手幹線建設事業は、六甲山地南側の東西の幹線道路として計画されたもので、芦屋市内では約2.3kmが事業区間になっている。

この事業はJR芦屋駅前など一部の区間においてはすでに事業が進められていたが、平成7年1月17日に発生した兵庫県南部地震の結果、この事業は兵庫県の阪神・淡路大震災復興事業の1つとして位置づけられ、その整備が急がれることになった。

芦屋市では事業予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地が確認されていたことから、平成9年度に芦屋市教育委員会により埋蔵文化財の確認・試掘調査を実施した。その結果、事業予定地内に存在する寺田遺跡・月若遺跡などにおいて、遺構・遺物が濃密に分布していることが明らかになった。その結果を受け、芦屋市および芦屋市教育委員会は神戸市との間に兵庫県教育委員会を立会人として「埋蔵文化財の発掘調査業務に関する協定書」を締結し、都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査を委託することになった。平成14年度は発掘調査の3年次目にあたり、月若遺跡第68・69・70地点を発掘調査した。

(2) 発掘調査の経過

- | | |
|-------|---|
| 第68地点 | 平成14年度は、月若遺跡（第68・69・70地点）の3地点について発掘調査を実施した。平成14年6月3日に調査用の資材・仮設物を搬入し、仮囲い作業を開始した。6月5日には重機を搬入し、西側調査区であるⅠ区から掘削を開始した。6月7日には遺構検出・遺構精査を終え、全景写真撮影と図化作業を終了した。下層の断ち割り調査を実施したが、遺構などを確認することはできず、6月10日に芦屋市教育委員会による現地立会い後Ⅰ区の調査を終了、引き続きⅡ区の重機掘削を開始した。6月13日遺構精査を終了し、全景写真を撮影した。6月14日には図面作成などを終え埋め戻しを行い、調査を完了した。 |
| 第69地点 | この地点も掘削土の仮置き場の都合から調査区を2分割し、6月14日から重機を搬入して西側のⅠ区から掘削を開始した。しかし、6月19日から7月1日までの間、調査を一時中断することになった。 |

7月2日から調査を再開し、7月3日に第1遺構面で中世の遺構と同一面で確認された近世遺構の写真撮影と実測を終了した。7月5日に第1遺構面の写真撮影を行った。第2遺構面は7月9日に遺構精査と図化作業を終え、全景写真撮影を行った。7月15日に測量用の基準点を打設し、第3遺構面の全景写真を撮影した。7月16日に図面作成を終え、下層の断ち割り調査を行い遺構・遺物が存在しないことを確認し、重機による埋め戻しを行い調査を終了した。

Ⅱ区は7月17日から重機掘削を開始したが、第1遺構面で遺構を検出することはできなかった。第2遺構面では河道が検出され、7月23日に図面作成と写真撮影を終えている。第3遺構面は河道によって削平されており、遺構面は確認できなかった。7月24日に下層の断ち割り調査を改めて行った後に、重機により埋め戻した。7月26日には仮囲いの撤去や清掃を行い、現地作業を完了した。

第70地点

7月29日に調査用資材などを搬入し、仮囲い作業を開始した。当初掘削土の仮置き場の都合から、南北2地区に2分割して調査を開始したが、その後新たに南側に調査区が追加されることになったため、最終的には3地区に分割して調査を行うことになった。

I区は7月30日から重機掘削を開始し、8月5日に測量用の基準点を設置した。第1遺構面では擾乱坑が多数存在していたにもかかわらず、掘立柱建物や土坑など多くの遺構を検出することができ、8月9日に全景写真とクレーンによる空中写真を撮影した。8月12日まで第1遺構面の図面の作成や柱穴の断ち割りを行なった。8月13日から第2遺構面の検出作業を開始し、8月22日に全景写真撮影、8月23日にはクレーンによる空中写真撮影を行った。第3遺構面の遺物は少なかったが溝などの遺構を検出し、8月30日に全景写真を撮影した。9月2日まで図面を作成し、第3遺構面の調査を終了した。

第3遺構面の調査を終えた段階で、下層の断ち割り調査を行ったところ遺構密度は高いものの新たに2面の遺構面が確認されたため、9月4日から第4遺構面の調査を開始した。しかし、調査深度が深くなるため安全性を考慮して、I区を東西に2分割してその西側から調査を始め、第4面は9月4日に第5面は9月5日に調査を終了した。東地区の第4・5遺構面の調査は9月5日に終了した。

9月6日からI区の埋め戻しを開始し、同時に北側調査区のII区の重機掘削を始めた。

第1遺構面では掘立柱建物3棟などを検出し、9月13日に第1遺構面の全景写真撮影、9月18日にはクレーンによる空中写真を撮影した。

第2遺構面は9月25日にクレーン撮影と全景写真撮影を行った。10月2日には第3遺構面の写真撮影を行い、10月3日に第4遺構面、10月5日に第5遺構面の調査を終えた。

10月6日には図面などの作成を終え、10月7日からII区の埋め戻しを行い、10月9日にII区の調査を終了した。

当初予定ではこのI・II区の調査のみであったが、I区の南側に新たに調査対象地区になったため、III区としてII区の調査に引き続き調査を行った。

10月10日からIII区の重機掘削を開始した。第1遺構面では堀状遺構を検出し、10月15日にクレーン撮影と全景写真撮影を行った。10月17日には第2遺構面のクレーン撮影と全景写真撮影を行い、10月22日には第3遺構面の調査を終了した。

III区においても下層の調査では安全性を考慮して、I区同様に東西に2分割して調査を行った。10月23日には西側調査区の第4・5面の調査を終え、10月24日には東側調査区の第4・5遺構面の調査を終了している。10月28日には重機による埋め戻しを終了し、10月29日に調査資材などを搬出して現地調査を完了した。

整理作業

出土遺物の整理作業は、神戸市埋蔵文化財センターで実施した。

平成14・15年度の二か年で遺物の水洗作業、ネーミング作業、復元作業、金属器の保存処理、遺物実測、製図、遺物写真撮影、原稿作成などを行った。

(3) 発掘調査組織

平成14年度の発掘調査および出土遺物整理作業については、平成13年度に引き続き財団法人神戸市体育協会が、神戸市からの委託を受けて調査を実施している。

なお、発掘調査および出土遺物整理作業は右記の調査組織によって実施した。

平成14年度

神戸市文化財保護審議会委員 史跡・考古担当

檀上 重光 前神戸女子短期大学教授

工楽 善通 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長

和田 晴吾 立命館大学文学部教授

芦屋市教育委員会

教育長 三浦 清
(～12月4日)" 藤原 周三
(平成15年1月1日～)

社会教育部長 小治 英男

文化財課長 西川 孝夫

主査(学芸員) 森岡 秀人

係員(学芸員) 竹村 忠洋

係員 田中 尚美

嘱託(学芸員) 山内 芳子

嘱託(学芸員) 坂田 典彦

神戸市教育委員会事務局

教育長 西川 和機

社会教育部長 岩畔 法夫

文化財課長 桑原 泰豊

社会教育部主幹 渡辺 伸行

(埋蔵文化財指導係長事務取扱)

埋蔵文化財調査係長 丹治 康明

事務担当学芸員 内藤 俊哉

遺物整理担当学芸員 関野 豊

保存科学担当学芸員 中村 大介

財団法人神戸市体育協会

会長 矢田 立郎

副会長 鞍本 昌男

(専務理事事務取扱)

常務理事 梶井 昭武

総務課長 谷川 博志

総務課主査(兼務) 丸山 潔

" 菅本 宏明

事務担当学芸員 池田 毅

調査担当学芸員 前田 佳久

平成15年度

神戸市文化財保護審議会委員 史跡・考古担当

檀上 重光 前神戸女子短期大学教授

工楽 善通 大阪府立狭山池博物館館長

和田 晴吾 立命館大学文学部教授

芦屋市教育委員会

教育長 藤原 周三

社会教育部長 小治 英男

文化財課長 西川 孝夫

主査(学芸員) 森岡 秀人

係員(学芸員) 竹村 忠洋

係員 田中 尚美

嘱託(学芸員) 白谷 朋世

嘱託(学芸員) 坂田 典彦

神戸市教育委員会事務局

教育長 西川 和機

社会教育部長 高橋 英比古

参事 桑原 泰豊

(文化財課長事務取扱)

社会教育部主幹 渡辺 伸行

(埋蔵文化財指導係長事務取扱)

埋蔵文化財調査係長 丹治 康明

事務担当学芸員 内藤 俊哉

遺物整理担当学芸員 千種 浩

" 石島 三和

保存科学担当学芸員 中村 大介

財団法人神戸市体育協会

会長 矢田 立郎

副会長 矢野栄一郎

(専務理事事務取扱)

常務理事 野浪 建作

総務課長 谷川 博志

総務課主査(兼務) 菅本 宏明

事務担当学芸員 中谷 正

第2節 遺跡の立地と歴史的環境

(1) 遺跡の地理的環境

地理的に芦屋市は兵庫県南東部に位置し、東西約2.5km、南北約8.3kmの南北に長い市域を有している。東側と北側は西宮市と、西側は神戸市と市域を接している。

月若遺跡は閑静な住宅地がひろがる芦屋市月若町・西芦屋町を中心として広がる遺跡で、阪急電鉄神戸線を挟むように南北に広がっている。

地形的には、芦屋市の北側に六甲山地が東西に連なり、南側は大阪湾に面している。この六甲山地と大阪湾の間には狭長な臨海平野部が形成され、六甲山地から流れ出した中小河川によってもたらされた土砂の堆積による扇状地などが形成されている。

月若遺跡も六甲山地から流れ出す芦屋川によって形成された扇状地（芦屋川扇状地）の東半部に立地している。

今回建設される都市計画道路山手幹線は芦屋川扇状地を東西に横断する道路で、月若遺跡の南端部を通過するものとして計画されている。

(2) 歴史的環境

月若遺跡の所在する芦屋市には旧石器時代以後多くの遺跡が確認されており、多くの調査成果が報告されている。その個々の遺跡については各報告書などで詳述されているので、ここでは月若遺跡の立地する芦屋川扇状地上にある3遺跡について概観してみたい。

今回調査を実施した月若遺跡は、昭和60年に芦屋廃寺遺跡の範囲確認調査で発見された遺跡である。確認されて以後、これまでに70地点近い調査が実施され、遺跡は東西約200m、南北約350mの範囲に広がっていると推定されている。試掘調査や確認調査が多いため遺跡の性格については現在でも不明確な点が多いが、縄文時代から近世に至る複合遺跡であることが明らかにされている。

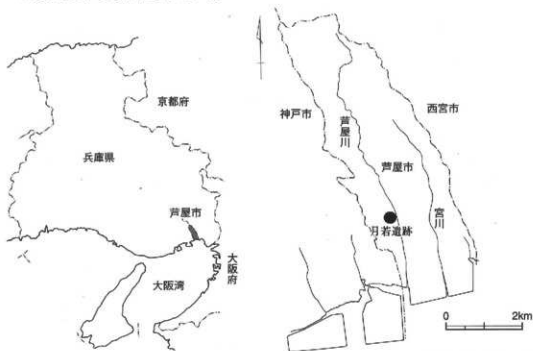


fig.1 芦屋市月若遺跡 位置図

縄文時代の集落については不明であるが、第13地点で早期から前期初頭、第2地点で中期末の土器が出土している。弥生時代前期から中期前半段階は遺構・遺物が希薄で、中期末から再び遺構が検出され、後期末から庄内式期には環濠の可能性のある大溝が第1・13・28地点で確認されている。そして遺構・遺物が最も濃密になる時期が古墳時代中期後半から飛鳥時代で、堅穴住居や掘立柱建物などが第1・10・13・18・19地点において確認されている。この時期の堅穴住居には、造り付けの竈を伴うものが多く見られるのが特徴となっている。また、遺物面でもこれらの調査地点においては、滑石製模造品が比較的多く出土することが指摘されている。中世以降の遺構・遺物は各地点で確認されており、集落域として安定していたことがうかがわれる。

芦屋川扇状地上で最も調査が進んでいる寺田遺跡は、月若遺跡の南西側に接する遺跡で、これまでに150地点以上の調査が行われている。山手幹線街路建設事業に伴う調査においても8地点を調査しており、寺田遺跡のこれまで不明確であった部分を補う資料が多数確認されてきているので、その成果を中心に寺田遺跡を概観してみたい。

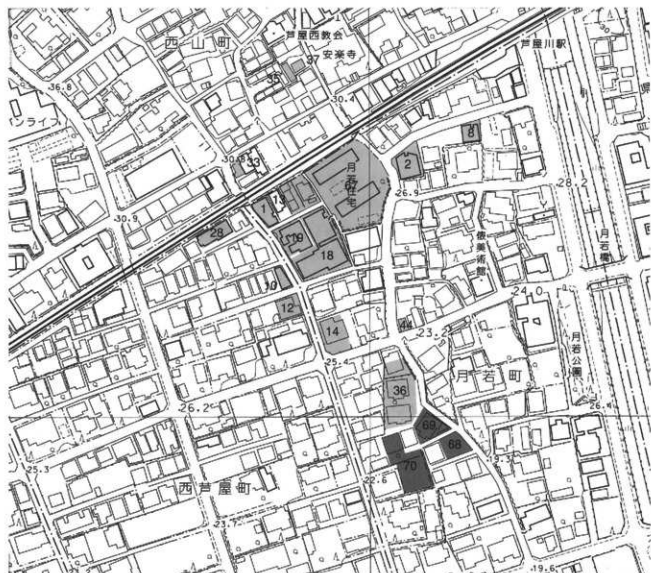


fig. 2 月若遺跡主要調査地点

縄文時代に遡る遺物は、これまで後期の土器が河道内などから出土することが知られていたが、第139地点で縄文時代晩期の遺構・遺物が確認され、この遺跡への集落の進出時期が明らかにされた。弥生時代前期の集落は、第133・141地点で居住域と貯蔵穴群の関係を明らかにする資料が得られ、弥生時代前期の集落が芦屋川扇状地と一体をなしている旧東川扇状地上にほぼ限定されることも判明した。続く弥生時代中期前半の遺構は、第127・130・132地点などの遺跡中央部のやや北側に確認されている。弥生時代後期後半から庄内式期と、古墳時代後期から飛鳥時代には堅穴住居や掘立柱建物などが多くの地点で調査され、集落規模が最も拡大していることをあらためて確認することになった。また、奈良時代には大型掘立柱建物が第127地点で確認され、北側に所在した芦屋廃寺との関連性が強く考慮されている。中世では山手幹線と交差する都市計画道路川西線街路事業で調査された第117・118地点でビット群が調査されていた。その東側にあたる第139地点にも遺構は広がり、多くの掘立柱建物を確認することができた。この付近が中世段階の集落中心部の可能性が高いと判断できる。

山手幹線街路事業に伴う発掘調査で多くの成果が明らかにされたが、遺跡全体の様相についてはまだ不明確な点が多く、今後の周辺地域の調査が期待される。

芦屋廃寺遺跡は寺田遺跡の北側、月若遺跡の西側に位置している。最も古くから遺跡として知られていた遺跡である。飛鳥・白鳳時代の瓦を多量に出土することから寺院跡として認知されていたが、長くその伽藍配置などの遺構については不明確であった。しかし、第62地点の調査において金堂の基礎跡と推定される遺構が確認されることになり、ようやく芦屋廃寺の様相がうかがう手がかりが得られることになった。この遺跡の下層には、弥生時代後期の遺構・遺物なども確認されており、遺跡の南半部を中心にこの時期の集落が広がっているものと推定されている。

これらの芦屋川扇状地上に立地する3遺跡は、遺跡の時期や検出された遺構などに共通点が多くみられる極めて強い関連性がうかがわれる遺跡で、遺跡群として捉えていかなければならないものと考えられる。

〔参考文献〕

- 村川行弘「考古学上からみた芦屋」『新修芦屋市史 本篇』芦屋市役所 1971
浅岡俊夫・古川久雄ほか「芦屋市月若遺跡-第10・13地点-」六甲山麓遺跡調査会 1993
森岡秀人・白谷朋世ほか「芦屋廃寺遺跡ほか発掘調査概要報告書 月若遺跡第12次地点・月若遺跡14次地点」芦屋市教育委員会 1992
森 正・岡本泰典「月若遺跡（第20地点）」「月若遺跡（第28地点）」『平成7年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所1996
岡本敏行・大道和人「月若遺跡（第35・37地点）」『平成8年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1997
小野田義和・目次謙一「月若遺跡（第36地点）」『平成8年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1997
高山正久・高山上枝・高山弘也「兵庫県芦屋市月若遺跡（第67地点）」高山歴史学研究所 2003
山田清朝・服部 寛「寺田遺跡（第117～124地点）発掘調査概要報告書」芦屋市教育委員会 2001
前田佳久・平田朋子・中居さやか「寺田遺跡発掘調査報告書-第127・130・132・133地点-」芦屋市教育委員会 2002
前田佳久・佐伯二郎・中居さやかほか
「寺田遺跡発掘調査報告書-第132・133・137・139・141・142地点-」芦屋市・芦屋市教育委員会 2003
森岡秀人・竹村忠洋「芦屋廃寺中核部の発掘調査（第62地点）」
「兵庫県埋蔵文化財担当者研修会資料」兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2000

第2章 月若遺跡第68地点の調査

第1節 調査の概要

この調査区は、地形的には芦屋川扇状地と芦屋川氾濫源の境界付近にあたる芦屋川右岸の低地部に位置していることから、芦屋川の氾濫の影響を大きく受けているものと考えられていた。しかし、調査の結果、遺存状況はよくなかったものの近世の遺構面を1面確認することができた。

調査区の現標高は19.6～19.9mで、ほぼ平坦になっている。面積は122㎡である。

(1) 調査の方法

調査地区は掘削土の仮置場などの都合上、調査対象地を東西に2分割（西側地区をⅠ区、東側地区をⅡ区）して実施した。

調査は盛土・攪乱、暗灰色砂質土（旧耕土）、洪水砂などについては重機で掘削し、近世遺物を主体とする遺物包含層（灰色粘性砂質土）から人力により掘削し、遺構の検出および精査を実施した。

(2) 基本層序

基本層序としては上層から盛土、旧耕土、淡灰黄色粗砂、洪水砂が堆積しており、洪水砂である淡黄灰色粗砂の下層に遺物包含層の灰色粘性砂質土を確認することができた。この遺物包含層には、古墳時代から近世に至るまでの遺物が含まれていたが、中世以前の土器については小片が多く磨滅も認められた。

遺構面は、灰色粘性砂質土を掘削した段階で検出された淡黄褐色粗砂の上面で、耕作に関連すると考えられる近世の溝状遺構などを検出することができた。この遺構面（淡黄褐色粗砂）以下については断ち割り調査を実施したところ、礫混じりの粗砂の厚い堆積が確認され、芦屋川の氾濫による堆積であることが理解できた。遺構面は近世の遺構面1面のみで、それ以外の遺構面については確認されなかった。

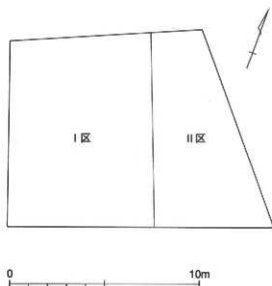


fig. 3 調査区地区割り図

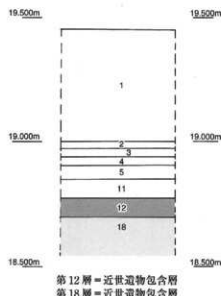
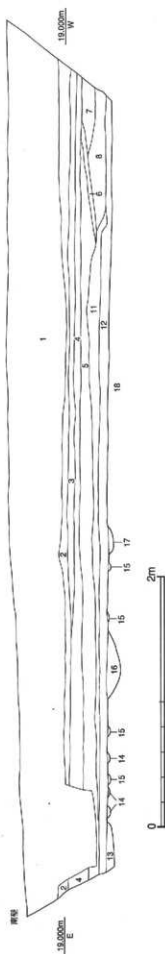


fig. 4 調査区基本層序柱状模式図



1. 黄土
2. 暗灰色砂质土 (近代耕作土)
3. 淡灰黄色粗砂 (近代洪水砂)
4. 灰色中砂
5. 淡黄褐色粗砂
6. 灰白色粗砂
7. 淡灰褐色粗砂 (细泥)
8. 淡灰灰色粗砂 (粗砂泥)
9. 淡灰白色砂质土 (粗砂泥)
10. 灰白色砂质土 (粗砂泥)
11. 淡黄灰色细砂 (4层~11层 近代洪水砂)
12. 灰色粘性砂质土 (古墳時代~近世遺物混含層)
13. 黄灰色中砂
14. 灰色砂质土
15. 淡灰色砂质土
16. 灰褐色砂质土
17. 淡灰褐色砂质土 (13层~17层遺物混含層)
18. 淡黄褐色粗砂 (近世以降基層)

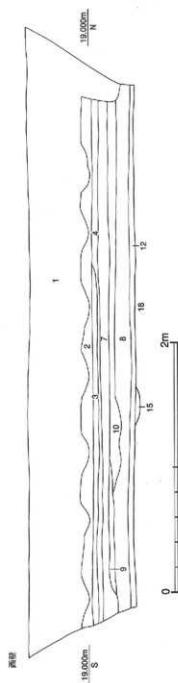


fig. 5 調査区南・西壁土層断面図

第2節 遺構と遺物

調査の結果、検出された遺構には溝状遺構30条、ピット2基、落ち込み1基がある。

(1) 溝状遺構

調査範囲が限定されているため、検出された溝状遺構のうち全容をつかめるものは少なく、その多くは調査地区外へのびていた。また、調査区の東半部では遺存状態が良好で、比較的密集して検出されたが、西半部では削平を受けているようで、遺存状況はあまり良好なものではなかった。

溝状遺構の多くは約30°西へ振った方向のもので、現在の街路区画とほぼ合致している。それに直交するような溝状遺構も確認されているが、削平のためか南北方向の溝状遺構よりも検出長は短かった。

溝状遺構の多くは幅0.3m前後で、深さ0.05m前後の浅い直線的な溝であるが、SD106やSD121のようにやや幅の広い不定形な溝状遺構もみられた。

時期については、出土遺物が少ないため特定することは困難であるが、染付け磁器の小片や陶器片が出土していることから、近世に属する遺構と考えられる。

(2) ピット

ピットは2基確認された。SP101は直径0.3m、深さ0.1m、SP102は直径0.6m、深さ0.25mを測るが、いずれも浅いもので柱穴になるようなピットではないと考えられる。

SP102は溝状遺構に削られていることから、期的には溝状遺構に遡る遺構と考えられるが、遺物が出土していないため時期については明確にできなかった。

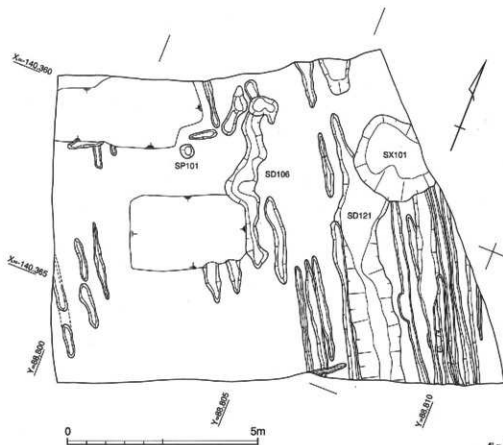


fig. 6 遺構平面図

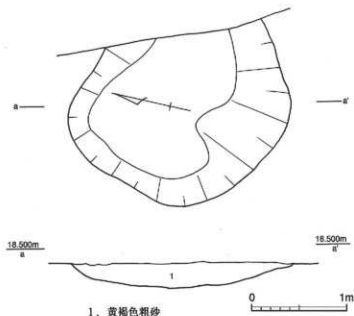


fig. 7 S X 101平面・断面図

(3) 落ち込み

検出された落ち込み S X 101は、溝状遺構を切り込むように検出された土坑状のものである。北東部分が調査地区外へ広がっているため全容は判然としないが、長径2.4m、深さ0.2mの不整形形を呈する浅い落ち込みである。

出土遺物に土師器小皿の小片がみられたが、図化できるものはなかった。溝状遺構を切り込む遺構ではあるが、出土遺物から近世に属する遺構と考えられる。

(4) 遺物

遺物は溝状遺構や落ち込みの中、また遺物包含層である灰色粘性砂質土から土器の小片が少量出土している。しかし、図化できるものはなかった。土器の中には染付磁器や陶器片が含まれていることから、近世に属する遺物であると判断できるが、詳細な時期については明確にすることができなかった。

第3節 小結

この第68地点の調査では、近世以前に遡る時期の遺構については確認することができなかった。この地点は芦屋川の氾濫原から芦屋川扇状地部へ上がる傾斜変換点付近にあっていることから、近世以前の遺構面が芦屋川の氾濫によって削平されてしまった。あるいは、近世以前には生活域として活用できない地点であったことなどが考えられる。しかし、その後調査されたこの地点の北側にあたる第69地点における調査の結果では、弥生時代後期の遺物包含層を削る中世後半段階の河道が検出されていることから、この付近にも本来は弥生時代以降の生活域が広がっていたが、中世以後の芦屋川の氾濫などに伴って、遺構面が削平されてしまった可能性が高いのではないかと考えられる。

今回検出された溝状遺構については、遺構面が粗砂層であったことから、溝の底面に明瞭な鋤や鍬などの農具の痕跡を確認することはできなかった。しかし、これまで多くの遺跡で調査された同様の溝状遺構の調査成果から判断すると、耕作の痕跡を示したいわゆる鋤溝と呼称される遺構と同一のものと考えられる。

第3章 月若遺跡第69地点の調査

第1節 調査の概要

この調査区も第68地点同様に調査地が狭いため、便宜上調査区を東西に二分割（西側：Ⅰ区、東側：Ⅱ区）して、Ⅰ区から調査を行った。

(1) 調査の方法

発掘調査は盛土および攪乱・旧耕土層・床土層を重機によって掘削した後、人力により遺物包含層の掘削、遺構の検出および精査を実施した。

(2) 基本層序

調査の結果、調査区のほぼ中央部分が河道部分（東半部）から扇状地（西半部）へ向かう傾斜変換点付近にあたっており、東側と西側では大きく土層の堆積状況が異なっていることが判明した。ここでは西側の扇状地部分の土層を基本層序として記述する。

基本層序としては、盛土および攪乱層・旧耕土層・床土層の下層に、暗灰色砂質土層が堆積しており、この上面で第1遺構面が検出される。この第1遺構面では、中世段階の遺構と近世段階の遺構が検出された。

第1遺構面を形成する暗灰色砂質土層には、弥生時代から中世前半の遺物が比較的多く包含されている。この層の下層は黄灰色細砂層になり、この上面で遺構面（第3遺構面）が検出されている。第3遺構面では中央部に谷状の落ち込みが確認されており、その谷が埋没する途中の黒褐色砂質土層の上面でも遺構面（第2遺構面）を確認している。

第2遺構面のベース層である黒褐色砂質土層には多量の弥生時代後期の土器が含まれており、後に詳述する河道は、この第2遺構面に伴うものと考えられる。第3遺構面では遺構が少なかったが、弥生時代後期の遺構面である可能性が高いと考えられる。

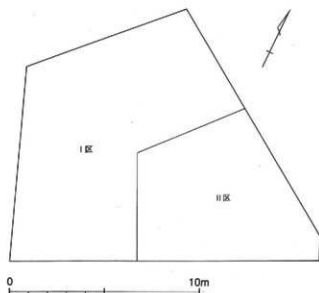


fig. 8 調査区地区割り図

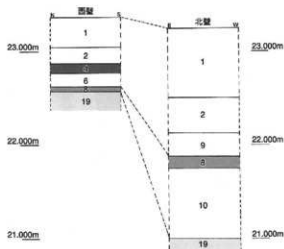


fig. 9 調査区基本層序柱状模式図 (S=1/250)

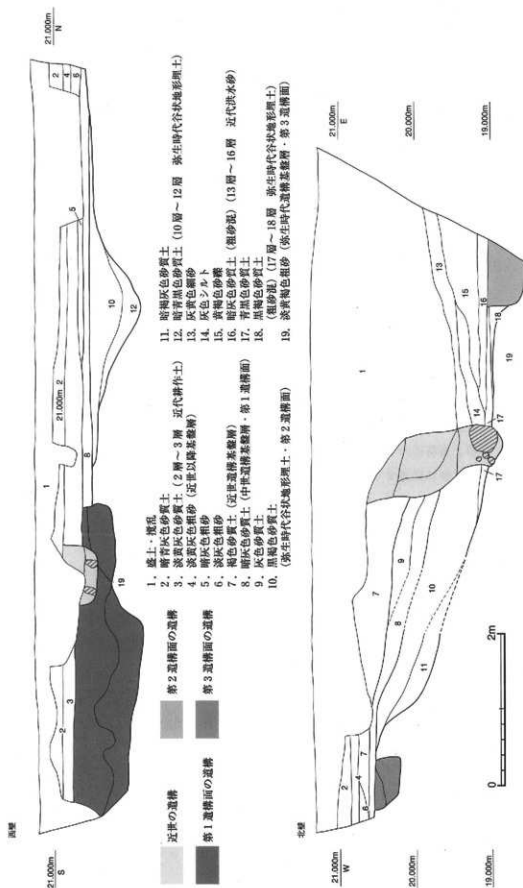


fig.10 調査区北・西壁土層断面図

第2節 第3遺構面

第69地点では、弥生時代から近世に至るまでの3時期の遺構面を検出することができたが、厳密には3時期の遺構面が検出されたのは、西側の扇状地傾斜面部のみであった。

第3節で詳述するが、調査区の東側3分の2については、第3遺構面よりも新しい時期に、河道が形成された際、本来の堆積層は川の流れによって削られて、河道の堆積物（fig10中第13層～第16層）に置換しており、第3遺構面を形成する黄灰色細砂層（fig10中第19層）の堆積は確認されなかった。

一方河道に削られることのなかった調査区の西側3分の1の部分では、現地表面から約0.5m掘り下げた、標高20.50m地点付近で第3遺構面を形成する黄灰色細砂層の堆積を確認している。黄灰色細砂層からなる面は、調査区西端でごくわずかに平坦な地形を形成しているが、大半は東へ下がる傾斜した堆積層である。この傾斜部分が谷状の地形を形成していたと思われる。

黄灰色細砂層からなる第3遺構面上で検出した遺構は、この谷状の落ち込み以外には、北西隅の平坦部分で確認した土坑1基のみである。

(1) 土坑

SK301

調査区の北西隅で検出された土坑である。西側が調査地区外へ広がっているが、検出された範囲では、短径0.8m、深さ0.3mを測る。楕円形土坑になるものであろう。

遺物は土師器の小片が出土していることから、弥生時代の遺構ではなく、古墳時代前期頃の遺構の可能性がある。



fig.11 第3遺構面平面図

(2) 谷状落ち込み

調査区の西端から傾斜がはじまり、東へむかって下がる谷状の凹みである。

調査区の東側 3 分の 2 は先述のとおり後世に削られてなくなっているが、調査区の大平がこの谷地形で占められる。

平坦面との比高差は、今回確認できた谷の最深部で約1.5mを測る。この谷状落ち込みの中には黒褐色砂質土 (fig10中第16層) が厚く堆積しており、多量の弥生時代後期の土器が含まれている。この埋土中には、検出レベルは若干異なっているものの、土器群を形成している箇所が4箇所 (土器群1~4) で確認された。いずれも弥生時代後期後半の土器群であった。したがってこの場所が谷状の地形であったのは、弥生時代後期後半の時期であったと思われる。

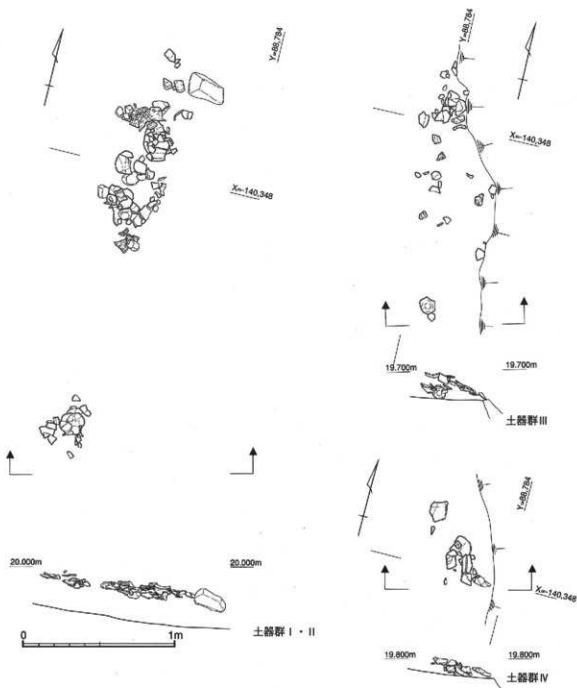


fig.12 第3遺構面出土土器群 平・断面図

第3節 第2遺構面

第2遺構面を形成しているのは、第3遺構面で確認した谷地形の埋土の黒褐色砂質土層上である。弥生時代後期の谷が黒褐色砂質土層によって埋没した標高20.65m前後が第2遺構面となる。第2遺構面上では、河道1条と溝1条、落ち込み1基を検出した。

(1) 河道

SD201

調査区のはほぼ東半部を占める、北から南へ流れる河道である。西側の一部が検出されたのみで、河全体の規模は不明である。今回確認した範囲では、西側の河岸部分から、最深部までの深さ約1.0m、河幅8.0mを測る。河道の埋土からは、磨滅した古墳時代頃の須恵器・土師器の小片が少量出土しているが、時期については明確にできなかった。

(2) 溝

SD202

溝の東側が、近世の遺構がつくられた際に削平されているが、残った範囲の規模は最大幅0.5m、長さ約3.0mである。埋土が粗砂であることから、人為的な遺構ではなく、傾斜面に水が流れた痕跡の可能性もある。時期を特定できる遺物は出土していない。

(3) 落ち込み

SX201

溝SD202の南で検出された浅い落ち込みである。SD201と同じく、遺構の東側が近世の遺構がつくられた際に削平されて、失われているため、形状・規模ともに不明確である。検出された範囲での規模は東西長が約1.6m、深さは0.2mを測る。底面に浅いビット状の落ち込みを1基伴っている。

出土遺物は少なく、いずれも小片のため、時期については明確にできなかった。

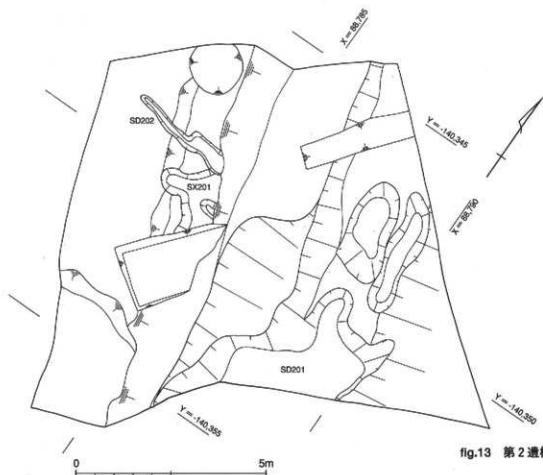


fig.13 第2遺構面平面図

第4節 第1遺構面

第1遺構面は標高20.50m地点付近で現れる、暗灰色砂質土上で確認された。この遺構面も下位の遺構面の地形が、西から東へ下がる斜面であったことに影響されて、調査区の東3分の2の範囲が、西側に比べ一段低い段をなしている。第1遺構面では、近世の遺構と中世と考えられる遺構が同一の層上で検出されたが、中世遺構を第1遺構面とし、近世遺構と区分して記述する。確認した遺構は、土坑1基と落ち込みが3基である。

(1) 土坑

SK101 落ち込みSX102の埋土を切り込んで造られている。長径1.4m、短径1.0mの不整形土坑である。遺物が出土していないため、時期は不明である。

(2) 落ち込み

SX101 調査区の南西隅で検出された。石積みを築く際に東側が削られており、西と東側の形状が不明確であるため。全体の形態・規模は不明だが、確認された範囲では径約3.5m、深さは約0.8mを測る。この遺構からは中世段階の遺物の小片が出土している。

SX102 東側に石積みを構築する際に削られているが、現存長約3.6m、現存最大幅2.5m、深さ約0.2mの浅い落ち込みである。底面で径約0.15mの小ピットを1基検出している。遺構に伴う遺物が少ないため、時期については明確にできなかった。

SX103 SX101同様、肩部が一部確認できたのみで、形態・規模ともに不明である。埋土は灰色砂質土で、今回確認できた範囲では深さ約0.25mを測る。この遺構も遺物の出土が少なく、いずれも小片のため、遺構の時期について明確にできなかった。

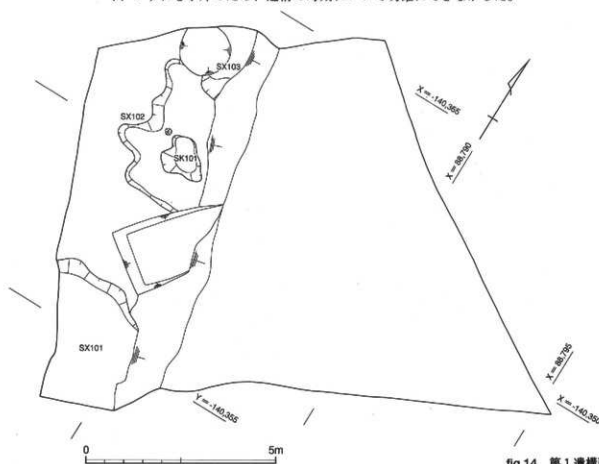


fig.14 第1遺構面平面図

第5節 近世遺構

第1遺構面と同じ暗灰色砂質土上面で確認された遺構のうち、近世段階のものと確認できた遺構だけを抽出した。この時期のものと確認されたのは、石積み遺構1箇所と石組みの排水暗渠が1基である。

(1) 石積み遺構

この遺構面も、下位の遺構面の地形が、西から東へ下がる斜面であったことに影響されて、調査区の東3分の2の範囲が、西側に比べ一段低い段をなしている。今回確認されたのは、この段部分に築かれた石積みである。

本来はあと数石分上に積まれて、1m以上の高さをもっていたものと推定されるが、宅地化される際に基底石以外の石は取り除かれてしまい、今回のような状態で確認されたと考えられる。ほぼ直線的に並べられた状態の、長さ約10m分の基底部の石を検出した。石材はすべて花崗岩であった。

使用された石は最大のもので幅0.6m、高さは0.5mを測る。石の平坦な面を東に向けて面を描えた、比較的丁寧なつくりの石積みであった。矢穴などの加工痕跡については確認できなかった。

石積みの裏込めは、拳大以下の礫と砂質土を使用して丁寧に埋め戻されていた。この裏込めの埋土から、近世の染付け磁器片が少量出土していることから、遺構の時期については、近世の遺構であると考えられる。おそらくこの遺構は近世の耕地の段を区画するもので、後述する暗渠は、耕地上段からの排水施設と考えられる。

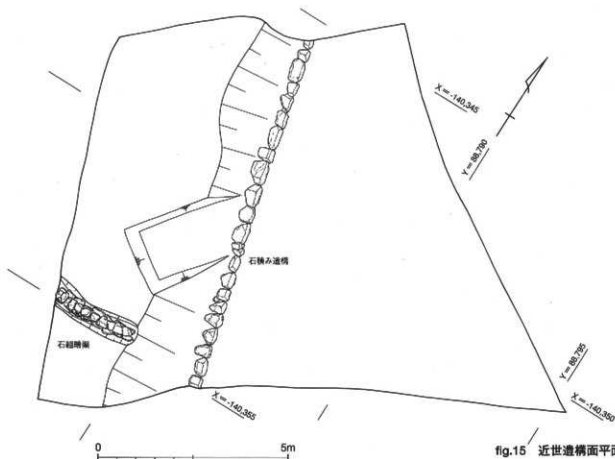


fig.15 近世遺構面平面図

(2) 石組暗渠

この暗渠は、前述した石積み遺構に直交するように検出されたものである。

検出できた範囲の幅0.6m、長さ2.5m分を調査したが、調査地区外へのびているため、遺構の全容や全体の規模については不明確である。

暗渠は、まず幅0.6mの溝を掘り、溝底面に長さ20～40cmの礫を15cm前後の間隔をもって2列に並べている。その礫の上部にさらに30cm前後の礫を据えて蓋とする構造である。

並べられた礫の間には灰黄褐色粗砂や暗褐色粘質土が堆積していることから、遺構が機能していた当時は内部に水が溜まっていたと考えられる。

この暗渠に伴う遺物はほとんど出土していない。そのため、遺構の使用された時期については明らかにできなかった。しかし、この暗渠と同時に作られたとみられる石積みとの関連から判断して、近世の遺構であろう。

第6節 小結

本調査区は、河道部分から扇状地への傾斜変換点にあたっていたため、検出された遺構は少なかった。しかし、遺構面は比較的良好に遺存しており、弥生時代後期から近世までの3面の遺構面を確認することができた。第1遺構面では暗渠と石積みが確認された。これらの遺構は、南側の第68地点で検出された近世の耕作関連の溝状遺構との関連が強く考慮される。

その他、第1遺構面では、中世の土坑や落ち込みなどが検出されたが、柱穴など掘立柱建物に伴うような遺構は確認されなかった。このことから、本調査区は集落の中心から少し離れた位置にあると判断される。

第2遺構面は、谷状の落ち込みが埋まる途中で営まれた遺構である。このことから、第2遺構面で確認された遺構は、人為的なものではなく、流水などの自然要因によって形成された遺構の可能性が高い。

第3遺構面では、遺構としては土坑が1基検出されたのみであるが、谷状の落ち込みの中から比較的にまっとうな弥生時代後期の土器が出土している。

今回の調査区では、遺構が形成されるような平坦面がこの調査区内では確認できないことから、この調査区の西側に広がる扇状地の高位部に、弥生時代後期の集落が展開しているであろうと推測される。

このように第69地点は、遺跡としての立地条件が良好ではなかったものの、今後この周辺地域を調査していくにあたって示唆的な情報をもたらす結果になった。

遺跡の本体はこの地点よりも西側から北側に展開していると予想されることから、今後の調査で月若遺跡の集落本体の様相が明らかにされるであろう。

〔参考文献〕

月若遺跡における弥生時代から古墳時代の集落については、下記の文献において詳しく述べられているので参照されたい。
森岡秀人「Ⅲ. 総括－月若遺跡をめぐる諸問題－」『平成6年度国庫補助事業 芦屋市内発掘調査概要報告書』芦屋市教育委員会 1995

第7節 第69地点出土の遺物

月若遺跡第69地点の発掘調査では、28リットル容量のコンテナ容器に約10箱分の遺物が出土した。遺物が出土したのは、調査地内の堆積層のうち主に、12頁の調査区内土層図に示した第7層（褐色砂質土）と呼ぶ遺物包含層および、その直下に堆積する、第1遺構面、第2遺構面、第3遺構面などである。

出土遺物の内訳は、28リットル容量コンテナ10箱のほとんどが土師器、須恵器、弥生土器といった土器類である。土器以外の出土品としては、サヌカイト製の石鏃が1点、漁労用の土鏝が2点、蛸壺が1点、滑石製の双孔円盤が1点、土製円盤が1点、土製勾玉が1点などが挙げられる。

本節では、第69地点の出土遺物のうち、各堆積層および遺構の特性を示すと思われるものについて、図化可能な範囲で選択的に抽出して図化作業を行い、掲載した。

(1) 第3遺構面出土の土器

第69地点第3遺構面では、遺構はほとんど確認されず、土器は自然地形である谷の中に堆積した黒褐色砂質土（第18層）内から集中して出土している。

fig.16に示した土器は、谷埋土から一括出土した土器のうち、残存状態が良好なものを図化したものである。

谷状落ち込み
出土の土器

1は弥生土器の広口壺の破片である。復元口径は16.4cm、残存部高は17.2cmを測る。なで肩だが、胴部にはりのある、球形の器体を有すと推測される。頸部に刻み目のある貼り付け突帯を施し、体部外面はハケの後ヘラミガキで調整している。内面は頸部から肩部に掛けて無数に指頭圧痕があり、胴部はハケで調整している。

2は弥生土器の壺の底部の破片である。底径は1.6cm、残存部高は4.5cmを測る。小さな底部に球形の胴が付くタイプと推測される。内外面とも磨滅したハケ調整が認められる。

3は弥生土器の鉢である。口径は14.9cm、底径は6.5cm、器高は9.0cmを測る。直口型で底部は指頭でひねり出して高台状に成形している。体部外面はナデを施し、内面はハケで調整している。底部に穿孔が施されている。

4は弥生土器の甕の破片である。復元口径は15.6cm、胴部最大径は16.6cm、残存部高は9.0cmを測る。

口縁部径より胴部径がわずかに勝るが、全体的にはスリム型の器形ではないかと推測される。口縁はナデによって端部に面を作っており、体部外面はタタキを施し、内面はナデで調整している。

5は弥生土器の甕の破片である。復元口径は14.5cm、残存部高は3.6cmを測る。

口縁部は内外面ともナデを施し、端部に外側面を作っている。頸部外面には磨滅しているがハケが認められる。

6は弥生土器の甕の破片である。復元口径は14.8cm、胴部最大径は18.8cm、残存部高は12.6cmを測る。やや球形化した体部は外面に螺旋状にタタキを施し、口縁部はタタキ出して成形している。端部はナデを施し、わずかだが外側面を形成している。外面肩部付近のみ、タタキのうえからナデを施しており、接合部分を調整したと思われる。その部分の裏面（内面）はハケが観察される。

7は弥生土器の広口壺である。復元口径は12.4cm、胴部最大径は15.2cm、残存部高は12.6mを測る。

なで肩で、胴部の中ほどに最大径をもつ。磨減が著しく、全体の調整は不明だが、体部外面に一部ハケが認められる。口縁部は内外面ともナデしており、端部はナデで外側面を作ったあと、わずかに摘み上げている。肩部内面に接合痕と、指頭圧痕が認められる。

8は弥生土器の甕の破片である。口縁部から腹部に掛けて欠損しており、底径は4.2cm、残存部高は15.2cmを測る。外面はタタキのち、全体に縦方向にヘラ磨きを施し、腹部の接合部のみ横方向のハケを施す。内面は磨減が進んでいるが、一部ハケが認められる。

9は弥生土器の甕の破片である。頸部から下が欠損している。口径は14.5cm、残存部高は3.8mを測る。

端部は内外面ともナデを施し、わずかが外側面を形成している。全体に磨減が進んでいるが、外面にタタキが認められる。

10は弥生土器の甕である。復元口径は13.9cm、胴部最大径は19.0cm、器高は25.6mを測る。腹部より上に張りがあるスリムな器形で、外面は全体に螺旋状のタタキを施している。口縁はたたき出して成形しており、内外面ともナデで調整し、わずかに外側面を形成している。底部、腹部、口縁部から腹部の3分割で成形されており、腹部内面にのみハケが施されており、接合痕を消すための調整と考えられる。

11は弥生土器の広口壺の破片である。復元口径は12.5cm、胴部最大径は20.0cm、残存部高は16.7cmを測る。

なで肩だが、胴部にはりのある、球形の器体を有す。口縁部は内外面ともナデを施し、端面を作り出したのち、つまみあげてわずかに立ち上げている。

体部外面は磨きを施し、内面は腹部より下にはハケが認められる。肩部～頸部内面は磨減しており調整は不明である。

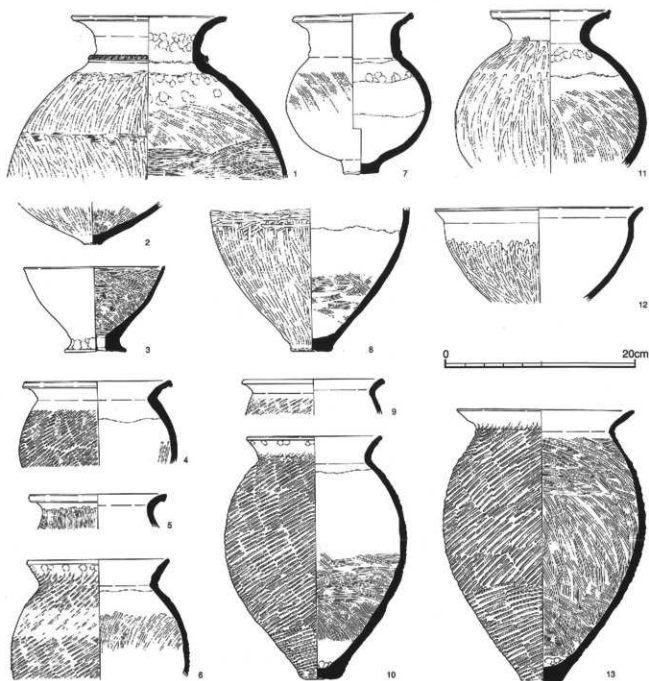
12は弥生土器の鉢の破片である。復元口径は21.8cm、残存部高は10.1cmを測る。口縁が「く」の字型に外反する器形で、底部は欠損している。口縁は浅く、端部も面をなさない。口縁部は内外面ともナデを施し、体部外面は磨きで調整している。体部内面は磨減が著しく、調整は不明である。

13は弥生土器の甕である。復元口径は18.6cm、胴部最大径は21.2cm、器高は28.8cmを測る。腹部より上に張りがあるスリムな器形で、外面は全体に螺旋状のタタキを施している。口縁はたたき出して成形しており、内外面ともナデで調整している。底部、腹部、口縁部から腹部の3分割で成形されており、内面は接合痕単位で方向の異なるハケが施されている。

谷状落ち込み

出土土器の時期

以上が第69地点第3遺構面で確認された谷地形の埋土から出土した土器の詳細である。これらの土器は器形、成形方などから、弥生時代後期に該当すると考えられる。体部中央よりやや上に胴部最大径がくるスリムな甕の器形、螺旋タタキで成形された甕の口縁、有孔の鉢、「く」の字に外反する鉢の口縁といったような、これらの土器の諸要素についてはおそらくⅤ様式からⅥ様式へ移行していく段階の時期のものではないかと考えられる。



2・7＝谷状落ち込み内土器群1出土土器（2＝甕 7＝壺）
 4・5・6・9・11・13＝谷状地形内土器群2出土土器（4・5・6・9・11＝甕 11＝壺）
 1・3・8・10・12＝谷状地形内土器群4出土土器（1＝甕 3・12＝鉢 8・10＝甕 1＝）

fig.16 第69地点第3遺構面谷状落ち込み内出土土器 実測図

(2) 第2遺構面出土の土器

第69地点第2遺構面でも、何点かの時期が判断できる土器が出土している。以下にそれらの土器の計測値等を示す。

SX201出土 の土器

14はS X 201から出土した土師器の甕である。復元口径は16.7cm、胴部最大径は17.3cm、器高は16.7cmを測る。

丸底で、張りのない緩やかな器形で、口縁は著しく短く、「く」の字に外反する。端部はつまみあげて成形しているため、やや上向きに外反している。口縁～頸部にかけては内外面ともナデを施している。体部外面にはハケを施し、ハケは底部にまで達している。内面は摩滅が進んでいるが、部分的にナデが観察できる。底部付近に指頭圧痕が多く認められる。

15はS X 201から出土した須恵器の杯である。底部が欠損しており、復元口径は11.3cm、残存部高は2.3cmを測る。浅く外反する立ち上がり有する。内外面ともナデを施す。

16はS X 201から出土した須恵器の杯である。底部が欠損しており、復元口径は17.1cm、残存部高3.2cmを測る。浅く外反する立ち上がり有する。内外面ともナデを施す。

SD201出土 の土器

17はS D 201から出土した土師器の甕である。直線的に立ち上がる口縁はごくわずかに内湾化している。端部は内側につまんで面を作り出している。体部外面には全体にハケを施し、肩部内面はハケののちナデで、腹部はヘラ削りで調整している。

18はS D 201から出土した土師器の皿である。底部が欠損しており、復元口径は8.8cm、残存部高は2.0cmを測る。直線的な立ち上がりの口縁で、外面はナデを、内面はハケを施している。

19はS D 201から出土した須恵器?の破片である。底部だけの破片で、復元底径は6.0cm、残存部高は1.3cmを測る。

20はS D 201から出土した弥生土器の破片である。底部だけの破片で、復元底径は3.6cm、残存部高は2.9cmを測る。外面にタタキが、内面に指頭圧痕が認められる。

21はS D 201から出土した弥生土器の破片である。底部だけの破片で、復元底径は3.8cm、残存部高は3.7cmを測る。外面にタタキが、内面にヘラ状の工具で抑えた痕跡が認められる。

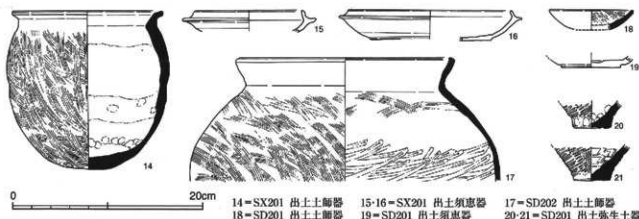


fig.17 第69地点第2遺構面出土土器 実測図

遺物の時期

第2 遺構面の遺構から出土した土器については、点数も少なく、幅広い時期のものが混在している。このことから、土器の時期が遺構の使われた時期を直接指示すとは考えられない。個々の土器についてのみ見るなら、S X 201から出土した土器のうち、14は古墳時代中期的な様相を示すが、同伴している15、16の須恵器は古墳時代後期のものである。

S D 201についても弥生時代のもの中世のものが出土している。この場合、層序的な関係から考えて弥生土器については、二次的な混入品ととらえるべきであろう。

(3) 土器以外の出土遺物

69地点の調査では、土器以外に土製品、石製品、石器なども数点出土している。これらの土器以外の出土品の内訳は、以下のとおりである。

土製品としては、飯蛸壺1点、土鍾2点と勾玉が1点、土製円盤が1点のほか、石鏃1点と砥石が1点出土している。これらのうち、遺構から出土したものは飯蛸壺と石鏃、その他は包含層中から出土したものである。以下に、各遺物の概要を記す。

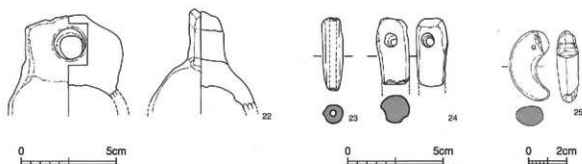
22は釣鐘型で須恵質の飯蛸壺である。SD202から出土した破片で、下半分が大きく欠損した破片のため、全体の大きさなどの詳細は不明である。紐孔径は1.6cm、残存部高は5.2cmを測るが、口径は欠損しており不明である。

23は、包含層から出土した管状土鍾である。小型品で断面形は楕円である。最大長は3.85cm、直径は1.0cmを測る。重量は4.55gである。

24は包含層から出土した棒状土鍾である。半分が欠損した破片のため、全体の量量などは不明である。残存部最大長は3.5cm、直径は1.4cmを測る。

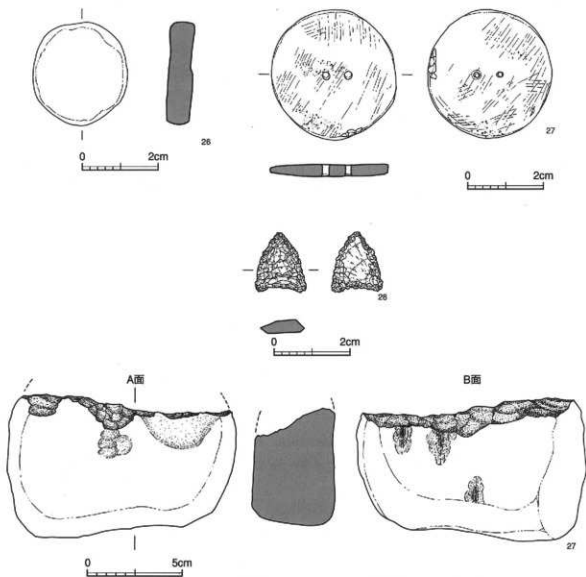
25は包含層から出土した土製勾玉である。頭部が一部欠損しているが、残存部長は3.1cmを測る中型品である。

26は包含層から出土した土製円盤である。直径が5.5cm、厚さは1.25cmと厚い。わずかに湾曲して表裏面が観察できることから見て、土器片を転用したものと考えられる。



22=SD202出土 須恵器飯蛸壺 23・24=包含層出土土鍾
25=第3包含層出土土製勾玉

fig.18 第69地点出土土製品 実測図



26=包含層出土 土製円盤 27=包含層出土 滑石製双孔円盤
28=SX102出土 打製石鏃 29=砥石

fig.19 第69地点出土石器・石製品実測図

27は包含層から出土した滑石製の双孔円盤である。直径は3.3cm、厚さは0.3cmを測る。円周方向に研磨したのち、全体を斜めに研磨した痕跡が観察できる。

28はS X 102から出土したサヌカイト製の打製石鏃である。基部がわずかに凹む凹基式石鏃で、最大長1.6cm、厚さ0.3cm、重量は0.5gを測る。薄片腹側面は、全体を深部調整したのち、周縁部を極浅に細部調整しているが、背面については、大剥離面をのこしたまま周縁部のみを極浅に細部調整している。断面形は六角形で、弥生時代に普遍的な形状の石鏃である。

29は砥石である。最大長は23.9cm、厚さは8.5cmを測る。磨耗した円礫を半割の状態で使用している。使用痕は切面以外のすべての面に認められるが、図中にA面として示した側と側辺については平坦な面状に使用痕が認められるが、B面として示した側には、凹溝状の擦痕が三箇所確認される。

(4) 金属製品

金属製品は鉄製品が23点、銅製品が2点、その他鉄製品製作関連遺物が2点出土している。なお、鉄製品のうち21点は鉄釘と鉄釘類似の棒状の鉄製品であり、表に計測値その他を記す。

これらの多くは、中世の遺物を包含する旧耕土層より出土している。

金属製品

22は釘と環を連結した形状を呈する鉄製品であり、淡灰色細砂より出土している。

構造は釘状品頭部の貫通孔に環が通っている状態で、釘頭部の孔は端部を巻き込んで製作されている。何らかの部材、部品に打込んで取り付け、引手のような用途に使われたものと考えられる。

法量は、釘部長さ4.3cm、身部太さ5.3mmを測る。環部は本来正円形であったと考えられるが、楕円形に歪曲してしまっている。長径4.7cm、短径3.6cm、太さ5mmを測る。残存する重量は6.6gである。

23は、断面楕円の鉄棒がC字形に湾曲したものであり、淡灰色細砂より出土している。本来の形状は不明であるが、現況では一端が1.2cm開放している。開放部は振れながら開いているため、本来は閉じていたものが2次的な作用で開いた可能性もある。長径3.1cm、短径2.5cmを測り、残存する重量は3.7gである。

24は銅銭で、褐色粗砂より出土している。

銭文は篆書体で「元豊通宝（初鑄1078年）」と読める。直径は2.4cm、厚さ1.1mm、残存する重量1.4gを測る。

25は厚さ0.8mmの薄い青銅板に鍍金を施した製品で、灰色砂質土より出土している。円板の端部を折り返し、受け皿状に整形している。復元される直径はおおよそ3.5cmで、折り返し部の高さは6mm、残存する重量は1.7gである。成分分析を行っていないが、内外面両方に金色の鍍金がなされている。これは把手などのように何かに埋め込まれたような部品ではなく、この製品単体で何らかの機能を持つものと考えられる。たとえば経筒など筒製品の蓋や、皿状容器などの用途が想像できよう。

製作関連遺物

26は片面が平坦で、裏面が扁平なドーム型を呈する碗形滓である。褐色砂質土より出土したものである。

若干の着磁性があるため、鉄製品製作時に生成されたものと考えられる。平面形は不定形で、一部に炉材が溶融したガラス質の滓や、礫を取り込んでいるが、表面全体が黄褐色の鉄サビに覆われている。

エックス線透過による観察からは全体的に多孔質であることがわかる。長径4.4cm、厚さ2.1cm、重量24gを測る。

27は輪の羽口と考えられるが、細片のため直径など詳細は不明である。

暗灰色砂質土よりの出土である。外表面には多孔質なオリーブ色の流動滓が付着している。内表面は剥離しており状況は不明であるが、破断面は比熱によって内から外へ赤褐色～暗灰色に変化している様子が観察できる。

胎土には直径1～3mmの長石、石英が多く含まれている。また粗穀や藁ササが混和材として用いられている。残存する法量は、長径4.0cm、短径3.7cm、厚さ1.8cm、重量25.4gである。

番号	頭部形式	長さ(cm)	頭部幅(cm)	身部径(cm)	重量(g)	出土層位
1	頭巻釘	10.1	0.9	0.4×0.5	3.4	灰色粘性砂質土
2	頭巻釘	7.5	0.6	0.4	1	淡灰色細砂
3	折釘	2.8~	0.6×1.0	0.4	4.3	灰色砂質土
4	折釘	7.5	1.3×2.0	0.7×0.8	18.5	黄灰色粗砂
5	頭巻釘	6.9~	1.2~	0.7	5.2	灰色砂質土
6	折釘	5.9~	1.3	0.6	7.7	黄灰色粗砂
7	頭巻釘	8.7	0.8	0.4	2	黄灰色粗砂
8	切釘	6.5~	0.6	0.5	2.6	淡灰色細砂
9	?	6.9~	-	0.5	3.9	暗灰色砂質土
10	?	6.9~	-	0.3	0.9	灰色砂質土
11	頭巻釘	6.5	0.6	0.5	0.9	暗灰色砂質土
12	?	4.7	0.6	0.3	0.7	灰色砂質土
13	?	5.8	0.5	0.3	0.6	淡灰色細砂
14	頭巻釘	6.4~	-	0.5	1.7	灰色粘性砂質土
15	?	5.1	0.5	0.3	0.6	灰色砂質土
16	?	5.0~	-	0.4×0.9	2.7	灰色砂質土
17	?	4.8~	-	0.4	0.7	灰色砂質土
18	切釘	4.0~	-	0.5	1.2	暗灰色砂質土
19	?	2.4~	0.3	0.2	0.1	灰色砂質土
20	?	2.2~	-	0.3	0.2	灰色砂質土
21	?	1.7~	-	0.3	0.1	灰色砂質土

表1 出土鉄釘計測表

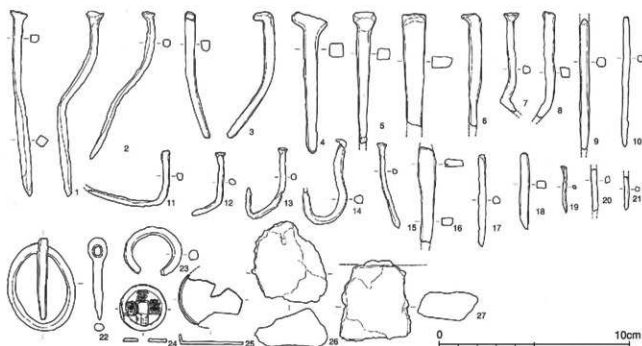


fig.20 出土金属製品実測図

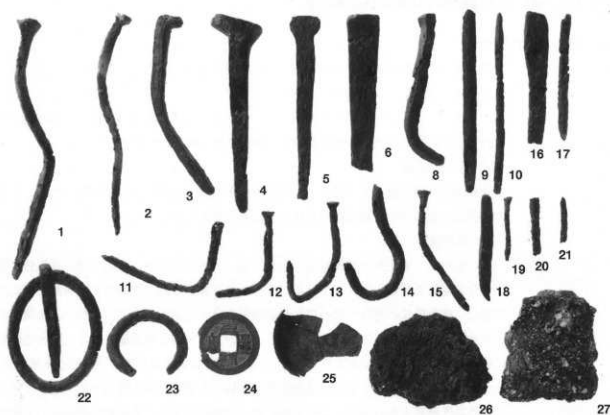


fig.21 出土金属製品

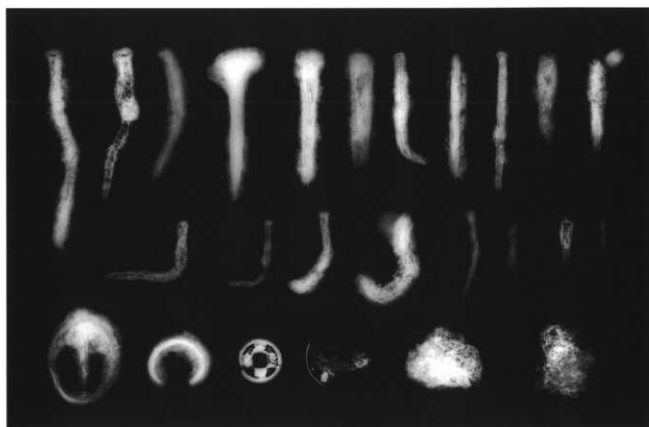


fig.22 同上X線透過像

(3、4、6、22以外：60kVp、3mA、40sec 3、4、6：100kVp、3mA、50sec 22：80kVp、3mA、50sec)

第4章 月若遺跡第70地点の調査

第1節 調査の概要

調査区は、月若遺跡第68・69地点の西側の扇状地平坦面部分にあたる。当初、南北約28mで調査を開始したが、掘削土の仮置き場を確保するため南北に二分割（南側：Ⅰ区、北側：Ⅱ区）し、Ⅰ区から調査を開始した。その後、Ⅰ区の南側（Ⅲ区）約10m部分が追加されることになったため、南北約38mの調査区を三分割して調査した。

(1) 調査の方法

発掘調査は盛土層および攪乱・旧耕土層・床土層を重機によって掘削した後、人力により遺物包含層の掘削、遺構の検出および精査を実施した。

(2) 基本層序

基本層序は、盛土層および攪乱層・旧耕土層・床土層となり、その下層の黄褐色砂質土層が中世の遺物を多量に包含している。次の暗灰色砂質土層上面は第1遺構面となるが、この層は、弥生時代の遺物を中心にした遺物包含層でもある。さらに下層に、北側で暗灰色褐色粗砂層、南側で暗灰色砂質土層があり、この上面が第2遺構面となる。暗灰色砂質土層に弥生土器の小片が少量含まれている。その下層には淡黄褐色粗砂層が厚く堆積しており、この上面が第3遺構面となる。淡黄褐色粗砂層の下層には暗灰色シルト層が、その下層に黒色粘性砂質土が堆積し、この上面が第4遺構面となる。黒色粘性砂質土の下層は淡黄褐色砂質土で、この上面で第5遺構面が確認されている。以下層についてはトレンチで確認した範囲では、遺構・遺物は確認されなかった。

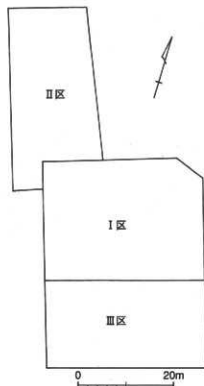


fig.23 調査区地区割り図

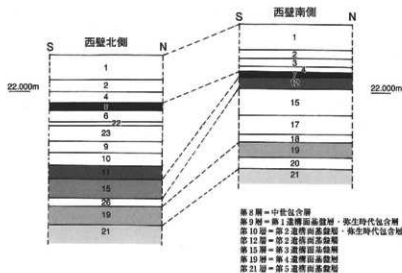


fig.24 調査区基本層序柱模式図 (S=1/100)

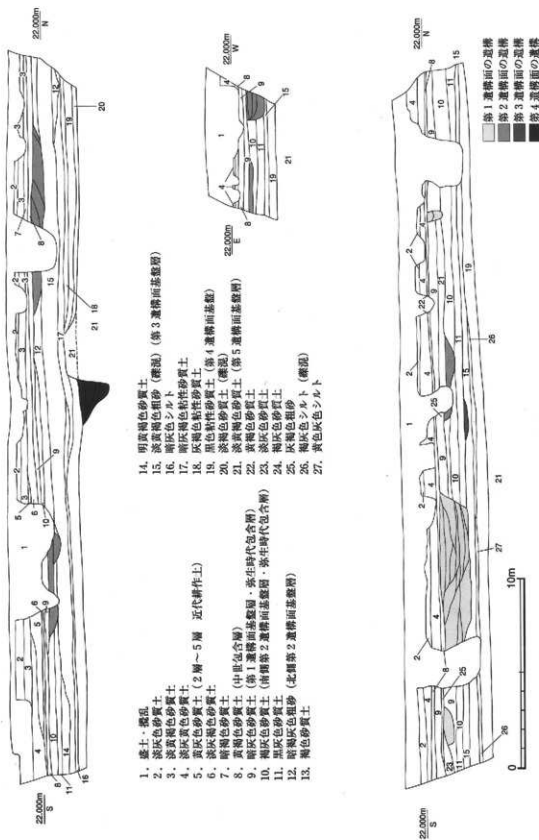


fig.25 調査区南・西壁土層断面図

第2節 第5遺構面

第5遺構面は、標高21.1～20.3m地点まで掘り下げたところで現れる、淡黄褐色砂質土の上面（fig25第21層）で確認された。今回の調査範囲内で確認できた遺構は、溝1条、土坑7基、ピット4基、落ち込み1基である。いずれの遺構も全く遺物を伴っていないため、時期については明確にできなかった。

溝 調査区の南角で検出された遺構である。平面は西に開く馬蹄形を呈する。深さは、約0.1m、長さは馬蹄形の両端部の距離で2.5mを測る。

土坑 調査区の随所で確認された土坑は7基で、どれも直径が1.0m前後の円形である。深さは0.1mから0.25m程度である。

落ち込み 調査区の西北部で確認された遺構である。遺構の一部を確認したもので、調査区の西外にさらに続いていくものと思われる。そのため全体の規模は不明だが、今回確認できた範囲では、平面形は東西に長い不整楕円形を呈し、深さは約0.6m、長径は2.0mを測る。全体の規模はさらに大きいと思われるが、今回は調査地外であるため、確認できなかった。

ピット 土坑と同じく調査区の随所で確認されたピットは、全部で4基である。どれも直径が0.35～0.5m前後の円形である。深さは0.1mから0.2m程度である。個々のピットの配置は不規則で、互いに関連性のあるものではないと考えられる。

前述のように、これらの遺構については全く遺物を伴っていないため、時期については明確にできなかった。

しかし、周辺部の月若遺跡の調査成果を考慮すると、縄文時代の遺構面である可能性が高いものと考えられる。



fig.26 第5遺構面平面図

第3節 第4遺構面

第4遺構面は、第5遺構面の直上に堆積する黒色粘性砂質土の上面（fig.25第19層）で確認された。この堆積層は標高21.3～21.6m地点まで掘り下げたところで現れる。

今回の調査範囲内で確認できた遺構は、第5遺構面の遺構と同様に、溝、土坑、ピット、落ち込みなどである。その内訳は溝2条、ピット5基、落ち込み1基となる。これらの遺構からの出土遺物に関しても第5遺構面の遺構と同様で、いずれの遺構も全く遺物を伴っていないため、時期については不明である。

調査区の北端で検出された遺構である。幅1.0m深さは、約0.05m、長さは2.5mと短い。調査区の北西角でも、一見溝状の平面形を呈する遺構を部分的に確認しているが、遺構のごく一部を検出したもので、大半は調査区外にあり、全体の形状、規模は不明である。溝ではない可能性もある。

溝の西側に隣接する位置で確認された落ち込みは、今回確認された範囲では、長約4.0mの不整形である。深さは0.1m程度である。

溝

調査区の東南部で確認された遺構である。遺構の一部を確認したもので、調査区の外にさらに続いていくものと思われる。そのため全体の規模は不明だが、今回確認できた範囲では、調査区の東端辺に沿って長さ約8.5mにわたって、東に傾斜するように落ち込んでいく。落ち込みの深さは確認できた範囲で約0.6mを測る。全体の規模はさらに大きく深いと思われるが、今回は大半が調査地外であるため、確認できなかった。

土坑

調査区の中央で確認されたピットは、全部で5基である。長径が0.5m前後の楕円形のものと同径が0.3m前後のやや小ぶりのものがある。深さは0.1m程度である。個々のピットの配置は不規則で、互いに関連性のあるものではないと考えられる。

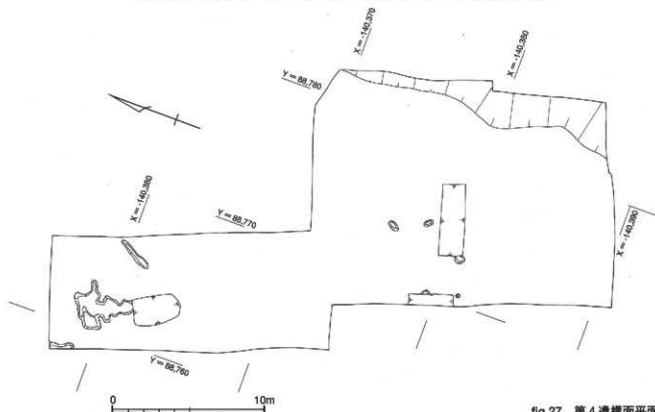


fig.27 第4遺構面平面図

第3節 第3遺構面

第3遺構面は第4遺構面より2層上位に堆積する淡黄褐色粗砂層の上面（fig25第15層）で確認された。この堆積層は標高21.4m地点付近まで掘り下げたところで現れる。

第3遺構面では溝2条、土坑30基、ピット13基、落ち込み12基の遺構を検出することができた。しかし、この面で検出された遺構からは土器がまったく出土していないため、時期については明確にすることができなかった。

遺構面を精査中に縄文時代に遡る可能性の高いサヌカイト製の石鏃が1点出土しているが、この遺構面の時期を示すものであるかどうかは判然としなかった。

溝

溝は、全部で2条確認された。どちらも調査区の中央やや南よりに位置する。東側の溝SD301は平面形は直線状で、南北方向に走る。幅約1.3m深さ約0.35mである。

上記の溝の西側で確認したもう1条の溝SD303は、蛇行する平面形で、最大幅約1.2m、深さ約0.15mである。どちらの溝も、端が調査区南半の掘乱に削られてしまっており、全体の規模や詳しい形状は不明である。

土坑

調査区の随所で確認された土坑は、規模、形状とも個体差があるが、おおむね楕円形の平面を呈するものが多い。底面にピットを1～2基ともなうものも、何箇所か確認されている。大きなもので長径が2.0m前後、小さいものでは1.0m程度である。深さは0.15m～0.4mと幅がある。長軸の方向にも一貫性がなく、個々の配置も不規則で、今回調査した限りでは、これらの土坑の互いの関連性などは見出すことができなかった。

ピット

土坑とおなじく、ピットについても調査区の随所で確認されたが、個々の配置は不規則で、互いの関連性などは見出すことができなかった。個々の規模には若干の個体差があるが、直径は0.3m～0.5m程度、深さは0.15m前後のものが多い。

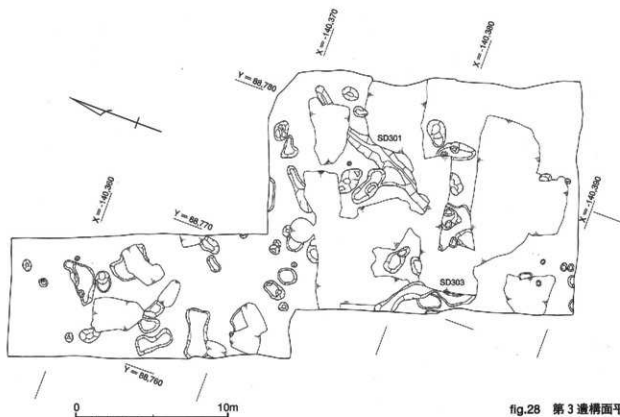


fig.28 第3遺構面平面図

第5節 第2遺構面

第3遺構面の直上に堆積する暗灰褐色粗砂および暗灰色砂質土の上面で確認された第2遺構面は、標高では21.7～21.2m前後の位置となる。第3遺構面および本遺構面では、その上位の第1遺構面の形成時に調査区南半が大きく削平されたため、遺構の遺存状況がよくなかった。にもかかわらず、第3遺構面と同様、本遺構面でも比較的多くの遺構を検出することができた。

検出された遺構は、溝3条、土坑20基、ピット31基、落ち込み4基であるが、遺物などを伴い時期を明確にできる遺構は少なかった。

本遺構面を形成する暗灰色砂質土層中には、弥生土器片が含まれていることから考えて、この土器の示す時期よりも新しい時期の遺構面であると考えられるが、出土した土器片が小片ばかりであるため、正確な判断は不可能である。ただし、SX203と番号を付した落ち込みに関しては、遺構の底面やや上の位置から一定量まとまった土器が出土しており、この遺構に関しては時期の判定が可能である。

(1) 溝

溝のうち2条は、調査区の北側で検出されている。どちらも南北方向に走るが、両者の走方向には若干の差異がある。

SD201

ほぼ真北に近い方向で走る溝である。全体の規模は不明だが、今回確認できた範囲では、長さが約15.0m、深さは0.2m程度である。

SD202

SD202は、調査区の北西角で、その一部が確認されている。SD201よりやや西に振れて南北に走る溝で、SD201と同様両端が調査区の外に伸びている。そのため全体の規模は不明だが、今回確認できた範囲では長さが約5.0m、深さは0.2m程度である。

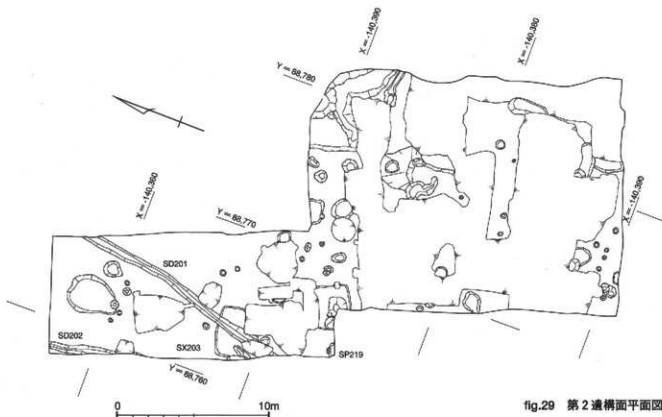


fig.29 第2遺構面平面図

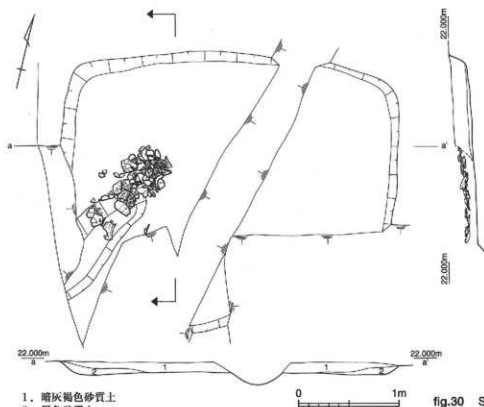


fig.30 S X 203平面・断面図

1. 暗灰褐色砂質土
2. 黒色砂質土

(2) 落ち込み

この面において、落ち込みは数基検出されているが、遺物を多量に出土した遺構について記述する。

S X 203

Ⅱ区中央やや南で、溝 S D 201 に切られるように検出された落ち込みである。攪乱のため不明瞭な部分もあるが、東西3.5m、南北2.8mの長方形状を呈する落ち込みである。深さは0.15mの浅いものである。

底面はほぼ平坦で竪穴住居の可能性も考慮されたが、柱穴が確認されないことから、落ち込みとしたものである。遺物は底面から少し浮いた状態でまとまって出土している。出土した遺物は、弥生時代後期後半の上器であった。

(3) 土坑

この面では土坑は全部で20基検出されているが、規模、形状ともに個体差がある。配置についても不規則で、検出状況からは、これらの土坑に関して、互いの関連性を見出すことができなかった。

S X 220

調査区北端部で検出された土坑 S K 220 は長径が約3.4m、深さ約0.1mの楕円形を呈するもので、本遺構面で検出された中では大型のものである。調査区南半でも数箇所の土坑を確認しているが、上位の第1遺構面の形成時に大きく攪乱されたため、遺構の遺存状況がよくなかった。

(4) ビット

ビットについても調査区の随所で確認しているが、不規則な配置で互いの関連性を見出すことができなかった。規模については若干の個体差はあるが、径が約0.3m前後、深さは約0.15m前後のものが大半である。S P 219と231からは柱材が出土している。

第6節 第1遺構面

今回の調査区では、現地表面である盛土と近・現代の耕作土を除去したところで、中世の遺物包含層（fig25第8層）が現れる。その直下に堆積する暗灰色砂質土層が第1遺構面となる。標高では22.1～21.6m前後である。この遺構面上では、掘立柱建物4棟、溝、土坑、ピット、落ち込み、堀状遺構などを検出した。

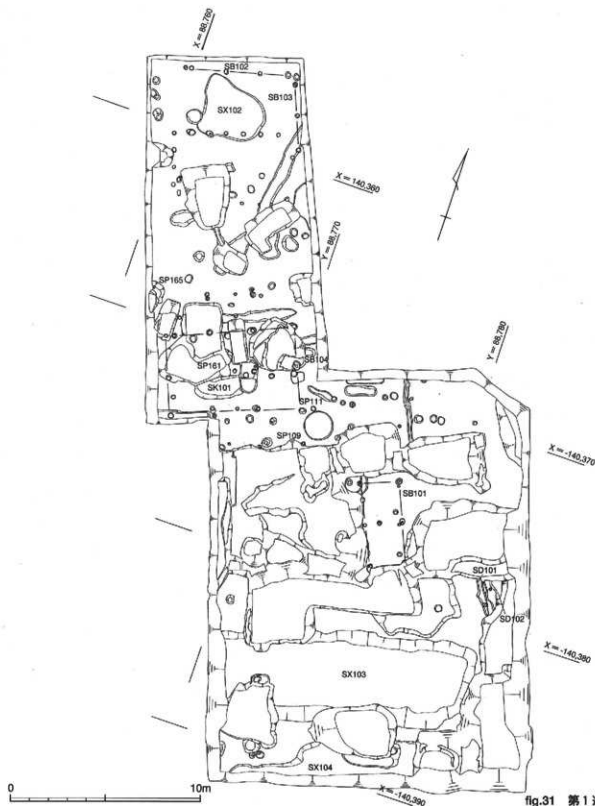


fig.31 第1遺構面平面図

(1) 掘立柱建物

掘立柱建物は4棟検出されたが、大きな攪乱を受けていることや、調査地区外へ広がる可能性があるなどの理由で、規模については明確にできない点もある。

S B 101

I 区のほぼ中央部で検出された建物である。攪乱の影響を受けているため、本来の規模は現状よりも大きいものと推定される。東西1間(2.0m)以上×南北2間(4.4m)以上の総柱建物である。建物主軸は西へ約24°振っている。

柱穴は直径0.3m～0.5mの円形のもが主体で、深さは0.2m～0.6mである。柱痕部分に10cm前後の円礫を据えているものが認められ、柱の補修痕跡を示すものの可能性がある。柱は0.1m～0.15mのものが多いようである。

柱穴内からの遺物が少ないため時期については明確でないが、出土した遺物の小片からは鎌倉時代初頭頃の建物の可能性が高いものと考えられる。

S B 102

II 区の北側で検出された建物である。建物南側の柱列が4基検出されたのみで、調査地区外へ広がっているため建物規模について明確ではない。柱間距離は1.8m～1.9mで、S B 101よりも短くなっている。建物主軸もS B 101とは少し異なり、西へ約15°振っている。

柱穴は0.25～0.4mのほぼ円形の掘形をもつもので、深さは0.15m～0.2mとやや浅いものである。断面観察では柱痕は確認できなかった。

S B 103

時期については、中世段階の掘立柱建物と考えられるが、出土遺物が少ないため明確にはできていない。しかし、S B 101と建物主軸方向や柱間距離が異なる点などを考慮すると、若干時期が異なっている可能性もある。末頃の時期が考えられる。

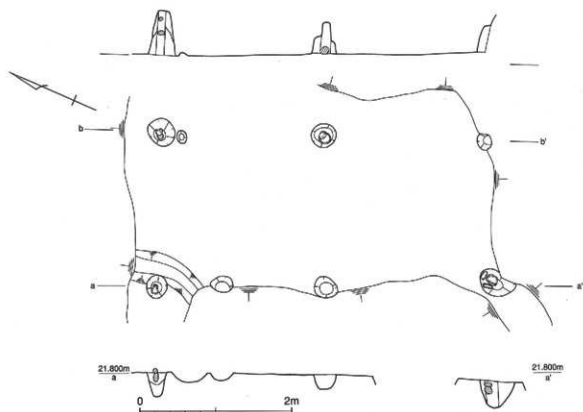


fig.32 S B 101平面・断面図

Ⅱ区の北側、S B102の東側で検出された建物である。建物西側の柱列が3基確認されたのみで、調査地区外へ広がっているため建物全体の規模については明確ではない。

柱間距離は1.7～1.8mで、S B102と近い規模の建物であると考えられる。建物の主軸は西へ約21°振っている。

S B104

柱掘形は直径0.25m～0.3mの円形のもので、深さは0.2m～0.4mを測る。P1には10～20cmの円礫が据えられていることから、補修痕跡のある柱穴の可能性が高い。

時期については、中世段階の掘立柱建物と考えられるが、出土遺物が少ないため明確にはできなかった。

Ⅱ区の南側で検出された建物である。調査地区外へ広がる可能性もあるが、今回確認された範囲では東西3間（6.8m）×南北2間（4.0m）の総柱の建物ではないかと考えられる。建物の主軸は西へ約23°振っている。

今回11箇所の柱穴列を検出しているが、これらの柱掘形は直径0.2m～0.5mの円形あるいは楕円形を呈している。柱穴の深さについては、上面が後世に削平されているものが多いが、今回確認できた範囲内では、深いもので0.5mを測る。11基の柱穴のうち、4基については、内部に10～20cmの円礫が据えられていることから、補修痕跡をとどめた柱穴である可能性が高い。

遺構の時期については、中世段階の掘立柱建物と考えられるが、出土遺物が少ないため明確にはできなかった。

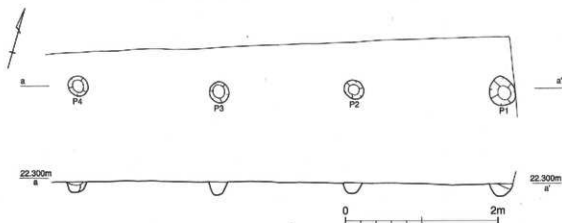


fig.33 S B102平面・断面図

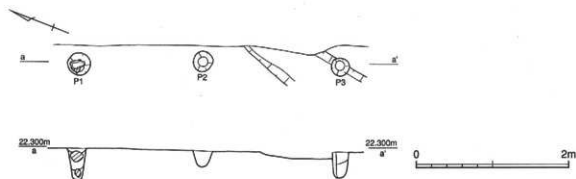


fig.34 S B103平面・断面図

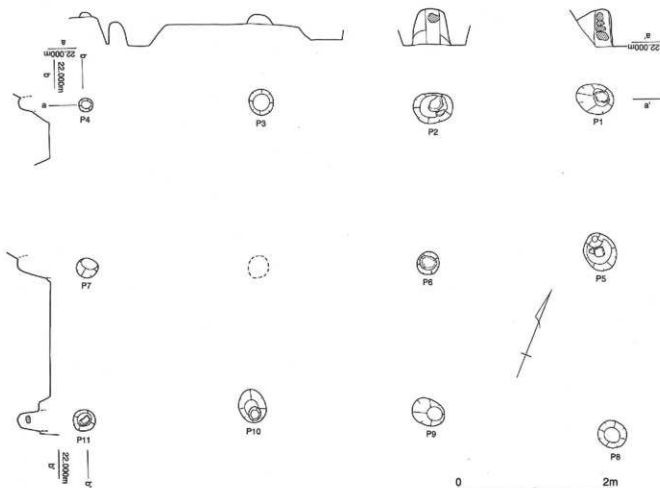


fig.35 SB 104平面・断面図

(2) 土坑

S K 101

I 区の北側で検出された土坑である。土坑の北側と東側は攪乱のために欠失しているが、今回確認できた範囲では、東西の径が2.5m、南北の径は1.2m、深さ0.45mを測る長楕円形の土坑である。この土坑からは、人頭大の円礫とともに飛鳥時代頃の須恵器壺・坏などが出土している。

(3) 落ち込み

S X 102

I 区の北側で検出されたもので、長径4.0m、短径3.5m、深さ0.15mの、浅い不整形な落ち込みである。

遺構底面から少し浮いた状態で、土師器の甕・坏などがまをもって出土している。この出土遺物から判断して、遺構の時期は、奈良時代と考えられる。

(4) 堀状遺構

S X 103

Ⅲ区で検出された遺構である。遺構の西の側が調査地区外へ広がるが、今回確認できた範囲では長さ約13.0m、幅5.0mの堀状の遺構である。堀の断面は逆台形を呈し、深さは約1.0mである。

遺物の出土は比較的少ないが、平安時代末～鎌倉時代前期の須恵器・土師器・瓦器・白磁などの小片が出土している。

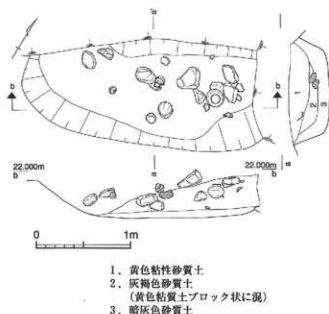


fig.36 SK101平面・断面図



fig.37 SK102平面・断面図

第7節 小結

今回の調査地は第69地点の西側にあたることから、弥生時代後期の遺構が濃密に検出されるのではないかと考えていたが、検出された遺構は少なかった。しかし、新たな成果も得られており、遺構面ごとにまとめてみたい。

第1遺構面では、予想もされなかった堀状の遺構の検出をあげることができる。この遺構は、扇状地端部に掘削されたもので、東側は東へ下がる谷部との間に、通路を兼ねているようにも見える掘り残し部分がわずかにある。埋土は大きく2層に分層が可能で、ある時期に改修を加えている可能性がある。遺物の詳細には現在のところ明確ではないが、鎌倉時代前半までにはおさまる段階の遺物であることから、この周辺地域の調査成果も考慮する必要がある。

今回4棟の掘立柱建物が検出されているが、いずれもこの堀状遺構の北側に検出された建物であることから、集落を区画するための堀であった可能性が高いといえよう。

第2遺構面でも遺構が多数検出されているが、予想された弥生時代後期の遺構は少なかった。時期や性格を明確にできる遺構が少ないが、この遺構面では弥生時代後期から古墳時代前期の遺構面であったと考えられる。

第3遺構面でも比較的多くの遺構を検出することができた。各遺構は比較的深いものも多くあり、遺構そのものはしっかりとしたものであった。しかし、伴う遺物が少なく、時期については明確にできていない。周辺地域の調査成果からは、弥生時代中期頃の遺構面である可能性が高いと考えられる。

第4・第5遺構面で検出された遺構は少なく、出土した遺物も少ない。しかし、周辺地域の調査成果を勘案すると、第4遺構面は縄文時代晩期、第5遺構面は縄文時代後期以前(前期?)の可能性もあり、今後注意の必要のある遺構面であると考えられる。

第8節 第70地点出土の遺物

月若遺跡第70地点の発掘調査では、28リットル容量のコンテナ容器に約22箱分の遺物が出土した。遺物が出土したのは、調査地内の堆積層のうち主に、29頁の調査区内土層図に示した第6層（淡灰褐色砂質土）～第8層（黄褐色砂質土）と呼ぶ遺物包含層および、その直下に堆積する、第1遺構面の基盤層（暗灰色砂質土）、その層上に残された遺構、さらにその下層の第2遺構面上の遺構である。

出土遺物の内訳は、28リットル容量コンテナ22箱のほとんどが土師器、須恵器、弥生土器といった土器類である。土器以外の出土品としては、サヌカイト製の石鏝が2点、漁労用の土鍬が2点、砥石の破片が1点、須恵器製の硯の破片4点が挙げられる。4点の硯の破片については、どれもごく小片のため図化は不可能だが、形状から判断して、円面硯の脚部の破片と考えられる。

本節では、第70地点の出土遺物のうち、各堆積層および遺構の特性を示すと思われるものについて、図化可能な範囲で選択的に抽出して図化作業を行い、掲載した。

(1) 第2遺構面出土の土器

月若遺跡第70地点の発掘調査で確認された2面の遺構のうち、より古い時期の第2遺構面では、いくつかの遺構から完形品にちかい近い状態で土器が出土している。それらの土器について以下にその計測値を列記する。

S X 203出土の 土器

29はS X 203から出土した土師器の甕である。焼成時に若干変形したため口縁部がいびつになっている。口径は17.4cm、胴部最大径は20.5cmを測る。器高は25.5cmである。

全体にスリムで、張りのない撫で肩の器形である。「く」の字形に外反する口縁部はやや長めだが、たたき出して成形したのち、ナデを施している。端部はシンプルにつまみだして作っている。

底部は尖り底に近いがわずかに平たい面を残し、わずかががスガが付着している。体部外面は、目の細かいタタキを施した後、磨いている。底部外面については、磨減が著しいため調整は不明である。内面は口縁部から体部にかけてナデを、底部付近はハケで調整している。

30はS X 203から出土した土師器の甕である。口径は15.0cm、胴部最大径は18.9cmを測る。器高は20.7cmである。

胴部が球形化した器形で底はわずかががドーナツ型である。口縁部は中ほどが最も厚く、外反するタイプである。

口縁部から頸部にかけて内外面ともナデを施し、肩部は目の細かいタタキで、体部外面は目の細かいタタキを行った後、ナメ方向のハケで調整している。底部は肩部と同様目の細かいタタキの後ナデている。肩部や底部にタタキ目がそのまま残っていることから、三分割成形でつくられたものと考えられる。内面は全体にハケを施しているが、底部の接合痕はナデで消している。

31はS X 203から出土した土師器の甕である。口径は16.9cm、胴部最大径は15.8cmを測る。器高は15.8cmである。体部径が口径よりも大きい器形である。胴部は肩のあたりがもっとも張っている。底部は欠損しているが、全体の器形から考えて、尖り底であると思われる。口縁は外反する「く」の字形で、端部はわずかに摘み上げている。

内面はハケ状の工具を強く押し当てて、削り込むように調整している。外面はハケの後、指あるいは布状の工具を用いて光沢が出るまで丁寧に磨いており、器体表面に擦痕が認められる。

32はS X 203から出土した土師器の甕の破片である。底部が欠損しており、口径は15.5cmを測る。残存部高は11.3cmである。

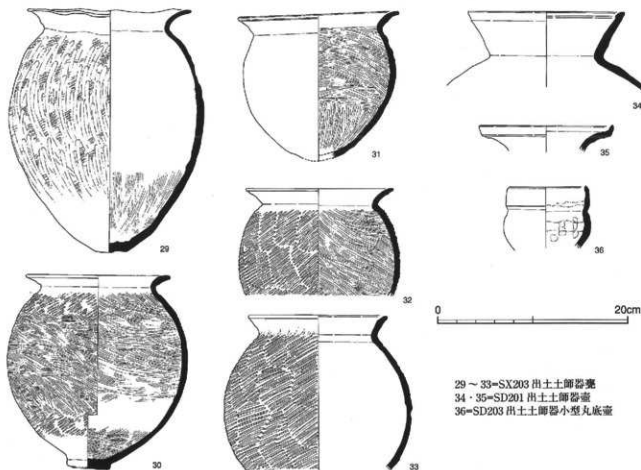
わずかだが、胴部径が口径を上回る。底部が欠損しているが、器体上半部の形状から、スリムな器形の甕と推測される。

口縁部は内外面ともナデを、体部外面は連続する螺旋状のタタキを施し、内面はハケで調整している。

33はS X 203から出土した土師器の甕の破片である。底部が欠損しており、口径は14.5cm、胴部最大径は19.5cmを測る。残存部高は16.3cmである。

「く」の字形に外反する口縁で、頸部は狭い。体部径が口径よりも大きい器形だが胴の中ほどに最も張る部分がくる、30の甕に似た器形ではないかと思われる。

体部内面はハケののちナデを施している。体部外面は連続する螺旋状のタタキを施し、口縁をたたき出して成形している。口縁部は内外面ともナデで仕上げられており、口唇部はつまみ出してつくられており、面をなさない形状である。



29～33=S X 203 出土土師器甕
34・35=SD 201 出土土師器壺
36=SD 203 出土土師器小型丸底甕

fig.38 第70地点第2遺構面出土 土器実測図

- S D 201出土の土器 34はS D 201から出土した土師器の壺の破片である。肩部までの破片で、復元口径は16.5cm、残存部高は7.9cmである。内外面ともナデで調整している。
- 35はS D 201から出土した土師器の壺の破片である。口縁部の破片で、復元口径は14.0cm、残存部高は2.8cmである。内外面ともナデで調整している。
- S D 203出土の土器 36はS D 203から出土した、土師器の小型丸底壺の破片である。底部が欠損しており、復元口径は8.0cm、残存部高は6.5cmである。口径と胴部径がほぼ等しいので肩の器形である。内外面とも磨滅が著しく調整は不明だが、体部内面には指頭圧痕が残る。

第2遺構面出土の土器 以上が第70地点第2遺構面の各遺構から出土した土器の概要である。これらの遺構からはここに示した以外に、実測不能な小片も一定量出土している。

S X 203出土の土器については、図に示した土器が一括で出土している状況から、出土遺物が直接遺構の時期を示すと考えてよいだろう。

29、30、31の土器は32や33の土器に比べて相対的に新しい時期の特徴を備えている。球形の胴部や細かく目の詰まったタタキ、あるいは丸底に近い尖り底などは、庄内式期からすでに布留式期の土器に移行する時期の印象を与えるものである。

32、33の土器は比較のスリムな器形や連続螺旋タタキ、口縁タタキ出しなど、庄内的な要素を多くそなえており、相対的に古相を示す。

ただし層位的な差がなく互いに交じり合って出土している状況から考えれば、S X 203出土の一括土器は、布留式の影響下にある在地型土器群としてとらえるのが妥当かと思われる。S D 201、S D 203についても、出土量は少ないが、実測可能な範囲では、おそらくS X 203と同時期の土器と考えられる。

出土遺物から見て、第70地点第2遺構面で確認された遺構の時期は、ほぼ古墳時代初め、頃ではないかと考えられる。

(2) 第9層出土の土器

第70地点の第2遺構面の基盤層となる第10層については、その直上に第2面の遺物包含層となる第9層（暗灰色砂質土）が堆積している。この層から出土した土器は、第2遺構面の時期とほぼ同一である。以下に包含層出土土器のうち、実測可能なものを抽出し、計測値を記す。

37は土師器の壺の破片である。口縁部の破片で、復元口径は8.0cm、残存部高は4.7cmである。「く」の字形に屈曲した口縁は内外面ともナデが施され、端部は面をなす。体部外面は磨滅しているが、タタキが観察される。内面はナデで調整している。

38は土師器の底部の破片である。底径は5.0cm、残存部高は4.0cmを測る。外面はタタキで調整されているが、内面は磨滅が著しく不明である。

39は土師器の高杯の破片である。脚底部が欠損している。復元口径は19.4cmで残存部高は13.8cmである。皿型の杯部にラッパ状に裾が開く脚部が付随するタイプである。口縁部は直線的に開き、口縁部高が脚部高にまさる。

杯部は内外面とも横方向にナデ、脚部外面は縦方向にナデを施す。脚部は円形のすかしを有する。

37= 第9層出土土師器壺
 38= 第9層出土土師器
 39= 第9層出土土師器高杯

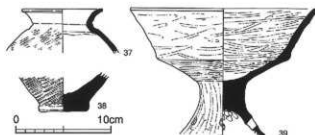


fig.39 第70地点第9層出土 土器実測図

(3) 第1遺構面出土の土器

第70地点の第1遺構面上で確認された各遺構からは、一定量の土器がまとまって出土している。これらの土器については、それぞれの遺構の時期を示すものと考えられる。

第1遺構面で確認された遺構のうち、もっともまとまって土器が出土したのはS K 101と呼称する土坑である。S K 101からは、須恵器、土師器などが一括で出土したが、そのうち残存状態が良好で図化作業に耐えうるものを図化し掲載した。

S K 101出土の
 土器

40は、須恵器の無頸壺である。口縁部から頸部にかけての破片で、体部以下は欠損している。復元口径は5.2cmで、残存部高は5.2cmである。直線的な端部で、内外面とも全体をナデで仕上げている。

41は、須恵器の短頸壺である。口径は9.4cmで、器高は14.3cmである。外方に面をなす端部を有し、内外面とも口縁部から体部にかけてはナデを施す。底部外面はヘラ削りの後ナデを施しており、ヘラの単位が観察される。底部内面には、ハケ調整の痕が見られる。

42は須恵器の脚付壺で卒る。口縁部の欠損した破片で、復元底径は6.8cm、残存部高は9.5cm、胴部の最大径は9.9cmである。全体に内外面ともナデで調整され、肩部と胴部に各1条の凹線を有する。

43は須恵器の高杯である。口径は11.6cm、器高は10.7cm、底径は12.8cmである。肩部と胴部に各1条の凹線を有する。全体に内外面ともナデで調整され、坏胴部と脚部に各1条の凹線を有する。

44は須恵器のはそうである。口縁部の欠損した破片で、残存部高は11.5cm、胴部の最大径は9.8cmである。外面は頸部から体部にかけてナデで調整され、底部はヘラ削り未調整のままである。肩部と口縁部付近に各1条の凹線を有する。

45は須恵器で、小型の壺、あるいははそうの底部の破片である。残存部高は2.0cmで、全体をナデで調整している。

46は須恵器のはそうである。体部のみの破片で、残存部高は6.8cm、胴部の最大径は9.1cmである。内外面とも全体にナデで調整されている。肩部に1条の凹線を有する。

47は須恵器の蓋である。天井部が一部欠損した破片で復元口径は8.7cm、器高は3.4cmを測る。内外面とも全体にナデで調整している。

48は土師器の小型杯である。口縁部が一部欠損した破片で復元口径は9.1cm、器高は2.7cmを測る。内外面とも全体にナデで調整しているが、内面には放射状の暗文を施す。

49は須恵器の蓋である。天井部が欠損した破片で復元口径は10.5cm、器高は2.5cmを測る。内外面とも全体に磨減が著しく、調整は不明である。

50は須恵器の坏である。底部が欠損した破片で復元口径は10.2cm、器高は2.8cmを測る。
内外面とも全体にナデで調整している。

SK101出土
土器の時期

SK101の一括出土土器については、器形から飛鳥時代のもと考えられる

第70地点の第1遺構面上では、4棟の掘立柱建物で確認されている。これらの建物の柱
穴からは、若干の土器が出土したが、大半はごく小片で、図化できたのはわずかだった。

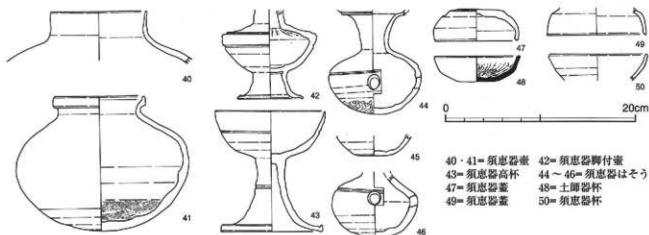
掘立柱建物
出土の土器

51は須恵器碗である。SB104と呼称した建物のP2柱穴から出土した。

底部の欠損した破片で、復元口径は16.5cm、残存部高は2.5cmを測る。直線的に立ち上
る口縁部で、体部は内外面ともにロクロナデを施す。

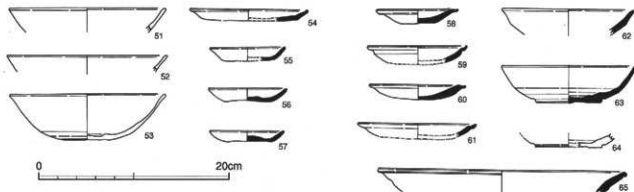
52は須恵器碗である。SB104と呼称した建物のP2柱穴から出土した。

底部の欠損した破片で、復元口径は16.9cm、残存部高は1.7cmを測る。直線的に立ち上
る口縁部で、体部は内外面ともにロクロナデを施す。



40・41= 須恵器壺 42= 須恵器脚付壺
43= 須恵器高杯 44～46= 須恵器はそう
47= 須恵器壺 48= 土師器杯
49= 須恵器壺 50= 須恵器杯

fig.40 第70地点SK101出土 土器実測図



51・52=SB04 - P2出土須恵器碗 53=SB104 - P9出土須恵器碗 54=SB104 - P9出土土師器皿
55～57=SB03 - P1出土土師器皿 58=SP104出土土師器皿 59=SP129出土土師器皿
60=SP165出土土師器皿 61=SP111出土土師器皿 62=SP161出土土師器皿
63=SP165出土土師器皿 64=SP129出土須恵器碗 65=SP109出土土師器碗

fig.41 第70地点第1遺構面掘立柱建物・ピット出土 土器実測図

53は須恵器埴である。S B104と呼称した建物のP 9柱穴から出土した
口径は16.5cm、器高は4.8cmを測る。器壁は薄く、外反する口縁部を有する。体部は内
外面ともにクロナデを施し、底部は糸切り痕が認められる。

54は土師器の皿である。S B104と呼称した建物のP 5柱穴から出土した。
底部の欠損した破片で、復元口径は12.4cm、残存部高は1.3cmを測る。口縁形態はいわ
ゆる「て」の字状口縁で、内外面とも全体にナデで仕上げている。

55は土師器の皿である。S B103と呼称した建物のP 1柱穴から出土した。
底部の欠損した破片で、復元口径は8.0cm、残存部高は1.4cmを測る。底部と口縁部の境
を屈曲させて、明瞭に両者を区別させる器形である。内外面ともナデで仕上げている。

56は土師器の皿である。S B103と呼称した建物のP 1柱穴から出土した。
口縁部の一部欠損した破片で、復元口径は8.3cm、残存部高は1.4cmを測る。底部と口縁
部の境を屈曲させて両者を区別させる器形だが、42の皿に比べて、口縁部の立ち上がりは
ゆるやかで、底部との境は不明瞭である。

57は土師器の皿である。S B103と呼称した建物のP 1柱穴から出土した。
口径は7.9cm、残存部高は1.1cmを測る。55と同じタイプのものである。内外面とも全
体にナデで仕上げている。

掘立柱建物出土
土器の時期 上記の掘立柱建物からの出土土器については、遺構の時期を判定するには出土量が少な
いため、遺物の年代が遺構の年代に直結するものと断言しがたい。個々の土器の年代につ
いては12世紀代の中世のものと考えられるが、土師皿などは形態変化の幅が狭い器種のた
め、一見して時期を判定するのは難しい。

ビット出土の
土器 建物の柱穴以外のビットからも、若干の土器が出土しているが、土師器の皿などの小片
がほとんどである。掘立柱建物同様これらの土器のみで、にわかに遺構の時期は判断でき
ないが、個々の土器の計測値については、下記の通りである。

S P 104 58は土師器の皿である。S P 104と呼称したビットから出土した。
口縁部の一部欠損した破片で、復元口径は8.5cm、残存部高は1.5cmを測る。「て」の字
状口縁と、屈曲型の口縁の中間形態のような器形で、底部と口縁部の境は明瞭に屈曲して
境を示すが、端部の形態は「て」の字に近い。内外面ともに全体にナデで仕上げている。

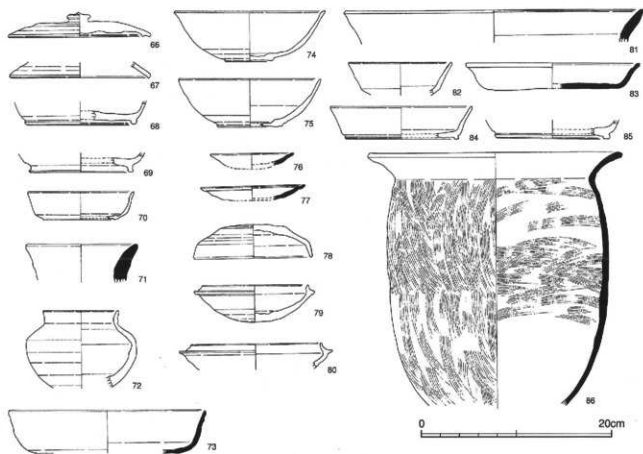
S P 129 59は土師器の皿である。S P 129と呼称したビットから出土した。
底部の欠損した破片で、復元口径は10.4cm、残存部高は1.7cmを測る。口縁形態はいわ
ゆる「て」の字状口縁で、内外面とも全体にナデで仕上げている。

S P 165 60は土師器の皿である。S P 165と呼称したビットから出土した。
底部の欠損した破片で、復元口径は10.2cm、残存部高は1.5cmを測る。口縁形態はいわ
ゆる「て」の字状口縁で、内外面とも全体にナデで仕上げている。

S P 111 61は土師器の皿である。S P 111と呼称したビットから出土した。
底部の欠損した破片で、復元口径は12.5cm、残存部高は1.4cmを測る。口縁形態はいわゆる
「て」の字状口縁で、内外面とも全体にナデで仕上げている。

S P 106 62は土師器の碗である。底部が欠損した破片で、S P 161と呼称したビットから出土し
た。口径は13.9cm、残存部高は2.7cmを測る。内外面ともナデで調整している。

- S P 165 63は土師器の椀である。S P 165と呼称したビットから出土した。
口径は14.0cm、残存部高は3.9cmを測る。直線的に立ち上がる口縁で、体部は内外ともナデを施し、底部は糸切り痕を残す。
- S P 129 64は須恵器の椀の底部の破片である。S P 129と呼称したビットから出土した。
復元底径は6.9cmで、残存部高は1.5cmである。体部は内外面ともナデを施し、底部は切り痕を残す。
- S P 109 65は土師器甕の口縁部の破片である。復元口径は26.0cmで、残存部高は2.4cmを測る。
口縁中ほどが肥厚する形態で、外方に面をなす端部を有する。内外面全体にナデを施す。
- S X 104 出土の土器 上記の遺構以外にも、時期の判る土器片が出土している遺構が数箇所認められる。それらの出土遺物の中から、図化可能なものを抽出した。
- 第1遺構面の遺構で、比較的多く土器を出土した遺構に、S X 104と呼称した遺構がある。以下にS X 104出土土器の計測値を記す。



- | | | |
|--------------------|--------------------|-----------------|
| 66・67=SX104 出土須恵器蓋 | 68～70=SX104 出土須恵器杯 | 71=SX104 出土土師器甕 |
| 72=SX104 出土須恵器蓋 | 73=SX104 出土土師器杯 | |
| 74・75=SD105 出土須恵器碗 | 76・77=SD105 出土土師器皿 | |
| 78=SD102 出土須恵器蓋 | 79・80=SD102 出土須恵器杯 | |
| 82=SX103 出土須恵器杯 | 83=SX103 出土須恵器高杯 | 81=SD102 出土土師器甕 |
| 84=SX102 出土土師器皿 | 85=SX102 出土土師器甕 | |

fig.42 第70地点第1遺構面遺構出土 土器実測図

66は、宝珠つまみのついた須恵器の蓋である。口径は15.1cm、残存部高は2.5cmを測る。内外面とも全体にナデを施す。

67は、須恵器の蓋である。つまみの有無は天井部が欠損しているため不明である。復元口径は14.6cm、残存部高は1.7cmを測る。内外面とも全体にナデを施す。

68は、須恵器の坏である。高台を有し、口縁部が欠損している。復元底径は11.6cm、残存部高は2.5cmを測る。高台の先端は丸みのあるタイプで、内外面とも全体にナデを施す。

69は、須恵器の坏である。高台を有するタイプで、口縁部が欠損している。復元底径は11.0cm、残存部高は2.0cmを測る。四角い先端が外にひらく高台で、内外面ともナデを施す。

70は、須恵器の坏である。底部が欠損している。復元口径は7.6cm、残存部高は3.0cmを測る。緩やかに外湾する口縁部で、内外面とも全体にナデを施す。

71は土師器壺の口縁部の破片である。復元口径は11.6cm、残存部高は4.1cmを測る。器壁は厚く、緩やかに外反する口縁部である。器体の磨減が著しく、調整は不明である。

72は須恵器の短頸壺である。底部の欠損した破片で、復元口径は8.0cm、残存部高は8.0cmを測る。肩の張った器形で、内外面とも全体にナデを施す。

73は土師器の坏である。底部の欠損した破片で、復元口径は20.7cm、残存部高は4.5cmを測る。内外面とも全体にナデを施す。

S D105出土 の土器

S D105と称した溝状の遺構からも、良好な状態の土器が数点出土している。

74は須恵器の碗である。一部が欠損している破片で、復元口径は15.9cm、残存部高は5.3cmを測る。緩やかに外湾する口縁部で、見込み部は明瞭に凹み、底部外面は糸切り痕を残す。体部は内外面とも全体にナデを施す。

75は須恵器の碗である。一部が欠損している破片で、復元口径は15.0cm、残存部高は5.1cmを測る。74と同じタイプの器形で、緩やかに外湾する口縁部、見込み部は明瞭に凹み、底部外面は糸切り痕を残す。焼成不良のため、磨減が著しく調整は不明である。

76は土師器の皿である。底部の欠損した破片で、口径は8.8cm、残存部高は1.2cmを測る。磨減が著しく調整は不明である。

77は土師器の皿である。底部の欠損した破片で、口径は11.0cm、残存部高は1.9cmを測る。いわゆる「て」の字状口縁だが、磨減が著しく調整は不明である。

S D102出土 の土器

S D102からは須恵器の蓋、坏、土師器の甕などが出土している。

78は須恵器の蓋である。口径は12.0cm、器高は3.5cmを測る。天井部外面はヘラ削りののちクロコナデを施す。天井部内面はヨコナデで調整している。

79は須恵器の坏である。内傾する短い口縁部で、端部は上方を向く。口径は11.2cm、器高は3.8cmを測る。体部は内外面ともナデを、底部外面はヘラ削りの後クロコナデを施す。

80は須恵器の坏である。内傾する短い口縁部で、端部だけが上方を向く。底部の欠損した破片で、復元口径は13.7cm、残存部高は3.8cmを測る。体部は内外面ともナデを施す。

81は土師器甕の口縁の破片である。復元口径は31.6cm、残存部高は3.4cmを測る。口縁中ほどがもっとも肥厚な形態で、内外面ともナデを施している。

S X103出土 の土器

S X103と称した遺構からは、須恵器の坏が出土している。

82は須恵器の高坏の口縁部片である。復元口径は11.0cm、残存部高は3.5cmを測る。

全体に内外面ともナデを施している。

84は須恵器の坏である。高台を有するタイプで、口縁部が欠損している。復元底径は11.9cm、残存部高は20cmを測る。高台の先端は四角いタイプで、内外面とも全体にナデを施す。

85は須恵器の坏である。高台を有するタイプで、底部が欠損している。復元口径は15.0cm、復元底径は11.9cm、復元器高は3.5cmを測る。高台の先端は丸く、外方に開くタイプで、内外面とも全体にナデを施す。

S X102出土 の土器

S X102と呼称した遺構からは、土師器の皿と甕が出土している。

83は土師器の皿である。底部が一部欠損している。口径は18.2cm、器高は2.7cmを測る。縁端部は丸くおさまるもので、口縁内側に退化した沈線状の段を有す。器体の磨減が著しいため、調整は不明である。

86は土師器の甕である。長胴で、底部は欠損している。口径は26.2cm、残存部高は27.0cm、胴部最大径は22.8cmを測る。外反する長い口縁に、端部は丸くおさまるタイプだが、口縁部は磨減が著しく、内外面とも調整は不明である。体部外面は縦方向のハケが、内面は横方向のハケが認められるが、どちらも磨減が進んでいる。

第1遺構面出土 以上が、第70地点第1遺構面の各遺構から出土した土器の概要である。

土器の時期

これらの土器が出土した遺構は、発掘調査時点では、同一の層、土層図に示した第9層（暗灰色砂質土）上で確認された遺構である。S K101、S X104などは、単一の時期の土器が一括して出土していることから、出土遺物の時期がおおむね遺構の時期を示すと考えてよいだろう。掘立柱建物S B104、S B103などからの遺物はごくわずかであり、前述の遺構に比べれば説得性に乏しくなる。S K101とS D102が飛鳥時代、S X102とS X104のものは奈良時代、S B104とS D105のものは鎌倉時代と考えられる。S D105は鎌倉時代でもより古相を示す可能性がある。

(4) 第8層土器の土器

第70地点第8層は、第1遺構面の残されていた第9層の直上位に堆積していたもので、第1遺構面にともなう遺物包含層と考えられる層である。この層から出土した土器は主に、須恵器と土師器である。坏、壺、甕、甕、皿といった器種が認められる。

87は須恵器甕である。底部が一部欠損した破片で、復元口径は17.2cm、残存部高は5.5cm、復元底径は6.3cmを測る。内湾ぎみに立ち上がる口縁部で、体部は内外面ともにロクロナデを施し、底部外面には明瞭に糸切り痕を残す。

88は須恵器甕である。底部の欠損した破片で、復元口径は16.0cm、残存部高は3.5cmを測る。内湾ぎみに立ち上がる口縁部で、体部は内外面ともにロクロナデを施す。

89は須恵器甕である。口縁部の欠損した破片で、復元底径は5.8cm、残存部高は4.5cmを測る。体部内外面ともにロクロナデを施し、底部外面には明瞭に糸切り痕を残す。

90は須恵器甕である。底部が一部欠損した破片で、復元口径は15.8cm、残存部高は5.2cm、復元底径は6.3cmを測る。口縁部は直線的に立ち上がり、体部は内外面ともにロクロナデを施す。底部外面には明瞭に糸切り痕を残す。

91は須恵器坏である。底部が欠損した破片で、復元口径は13.4cm、残存部高は3.3cmを測る。口縁部は直線的に立ち上がり、内外面ともにロクロナデを施す。底部付近の体部外面はヘラ削りで仕上げている。

92は須恵器坏である。底部が欠損した破片で、復元口径は17.2cm、残存部高は3.6cmを測る。口縁部は直線的に立ち上がり、内外面ともにロクロナデを施す。

93は須恵器坏である。底部が欠損した破片で、復元口径は11.0cm、残存部高は2.2cmを測る。口縁部は直線的に立ち上がり、内外面ともにロクロナデを施す。

94は須恵器坏である。底部が一部欠損した破片で、復元口径は14.0cm、残存部高は3.5cm、復元底径は9.8cmを測る。口縁部は直線的に立ち上がり、内外面ともにロクロナデを施す。底部はヘラ切りのおと、ナデを施している。

95は高台を有する須恵器坏の破片である。復元口径は15.0cm、器高は3.5cm、復元底径は11.2cmを測る。口縁部は、内湾気味に立ち上がり、内外面ともにロクロナデを施す。

96は土師器碗である。底部が欠損した破片で、復元口径は17.8cm、残存部高は3.4cmを測る。半球形に近い体部で、全体にナデを施し、端部はつまんで外反させている。

97は土師器碗である。底部が欠損した破片で、復元口径は11.5cm、残存部高は3.0cmを測る。内湾ぎみの体部だが、器体の磨減が著しいため、調整は不明である。

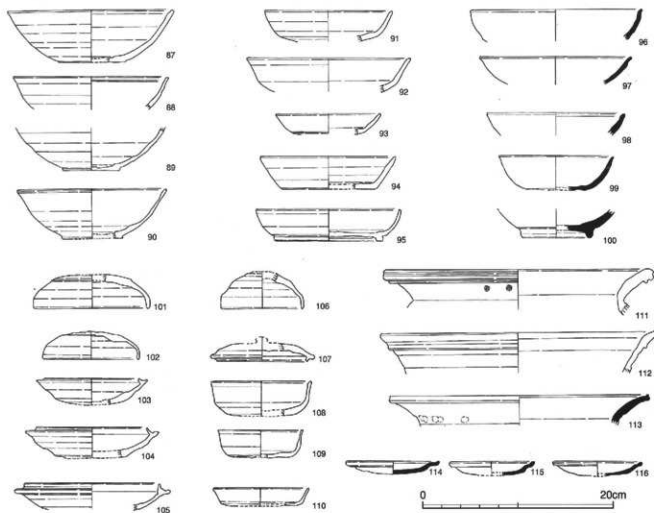


fig.43 第70地点第8層出土 土器実測図

98は土師器甕である。底部が欠損した破片で、復元口径は14.3cm、残存部高は2.4cmを測る。全体にナデを施した内湾ぎみの体部に、肥厚した口縁端部がつく。

99は土師器甕である。底部が一部欠損した破片で、復元口径は6.2cm、残存部高は3.6cmを測る。全体にナデを施した内湾ぎみの体部に、外反する口縁端部がつく。

100は高台を有する土師器甕の底部片である。復元底径は7.2cm、残存部高は3.0cmを測る。全体にナデを施しており、高台の端部は丸みを帯びている。

101は須恵器の蓋である。天井部を欠損した破片で、復元口径は12.0cm、残存部高は3.5cmである。内外面とも全体にクロコナデを、天井部はヘラ削りののちナデを施す。

102は須恵器の蓋である。口径は10.0cmと小ぶり、器高は3.0cmである。内外面とも体部はクロコナデだが、天井部はヘラ削りの後横方向にナデを施している。

103は須恵器の坏である。底部が欠損した破片で、復元口径は10.0cm、残存部高は2.7cmである。内外面とも全体にクロコナデを、底部付近はヘラ削りののちナデを施す。

104は須恵器の坏である。底部が欠損した破片で、復元口径は11.7cm、残存部高は3.2cmである。内外面とも体部はクロコナデで調整している。底部付近にはヘラ削りを施す。

105は須恵器の坏である。底部が欠損した破片で、復元口径は14.2cm、残存部高は3.7cmである。内外面とも体部はクロコナデで甲整している。底部付近にはヘラ削りを施す。

106は須恵器の蓋である。復元口径は8.5cm、残存部高は3.7cmである。内外面全体をクロコナデで調整している。天井部一はヘラ削りの後、ナデを施す。

107は須恵器の蓋である。天井部を欠損した破片で、復元口径は9.4cm、残存部高は1.8cmである。内外面全体をクロコナデで調整している。宝珠つまみが付くと思われる。

108は須恵器の坏である。底部が一部欠損した破片で、復元口径は8.8cm、残存部高は2.9cmである。内外面とも全体にクロコナデで、底部付近はヘラ削りののちナデを施す。

109は須恵器の坏である。底部が一部欠損した破片で、復元口径は10.4cm、残存部高は3.7cmである。内外面とも体部はクロコナデを、底部付近にはヘラ削りを施す。

110は須恵器の坏である。底部が一部欠損した破片で、復元口径は10.1cm、残存部高は2.9cmである。内外面とも体部はクロコナデを、底部付近にはヘラ削りを施す。

111は須恵器の甕の破片で、復元口径は27.7cm、残存部高は4.0cmである。ナデで調整した短い頸部に、竹管文で二箇所装飾を施し、外方に面をなす端部を有する。面には凹線を一条施し、口縁端部直下に断面三角形の突帯を一条めぐらす。

112は須恵器の甕である。口縁部の破片で、復元口径は28.8cm、残存部高は4.3cmである。ナデで調整した頸部に外方に面をなす端部を有する。

113は土師器の甕である。口縁部の破片で、復元口径は27.1cm、残存部高は3.2cmを測る。ナデで調整した頸部に外方に面をなす端部を有する。頸部に指頭圧痕が認められる。

114は土師器の皿である。口径は9.8cm、器高は1.4cmを測る。「て」の字状口縁」と呼ばれる、外反する短い口縁部で端部が肥厚な器形の皿である。全体にナデを施している。

115は土師器の皿である。口径は9.0cm、器高は1.3cmを測る。「て」の字状口縁」と呼ばれる、外反する短い口縁部で端部が肥厚な器形の皿である。全体にナデを施している。

116は土師器の皿である。口径は9.6cm、器高は1.4cmを測る。

第1包含層出土 以上に述べたように、第70地点第1遺構面の直上位に堆積していた遺物包含層（fig.25
土器の時期 第8層）からは、多岐にわたる時代の土器が混在した状態で出土している。

たとえば須恵器に関しては、87から90の須恵器境は鎌倉時代頃のものであり、91から95の須恵器境は、奈良時代のものであろう。101から105の須恵器境は、どれも浅い体部で、低く外反する立ち上がり有する、飛鳥時代のもと考えられる。106から109についても同様の時期のものであろう。遺物の時代が多岐にわたる点については須恵器だけでなく土師器についても同様で、この傾向は、包含層直下に堆積する第1遺構面上で確認された遺構の時期が多岐にわたっている事実を反映しているものと考えられる。

（5）土器以外の出土遺物

第70地点の調査では、土器以外に土製品と石器が数点出土している。内訳は土錘2点、石鏃1点と石皿が1点である。

117は第 層から出土した石皿である。礫の一部だけが残存する、破片である。使用痕は図中にA面として示した側とB面として示した側面に認められる。B面については平坦な面状に使用痕が認められるため砥石として使用したと考えられる。A面側には、凹状の使用痕が多数確認される。

118はSK307から出土したサヌカイト製の打製石鏃である。凹基式石鏃で、最大長1.3cm、厚さ0.3cm、重量は0.25gを測る。薄片は腹面、背面ともに全体を深部調整したのち、周縁部を極浅に細部調整を施している。断面は菱形である。

119は第 層から出土したサヌカイト製の打製石鏃である。凹基式石鏃で、最大長2.26cm、厚さ0.6cm、重量は1.36gを測る。薄片は腹面、背面ともに全体を深部調整したのち、周縁部を極浅に細部調整を施している。断面は六角形である。

120は、SX103から出土した管状土錘である。小型品で断面形は楕円である。最大長は4.3cm、直径は1.1cmを測る。重量は6.26gである。

121は包含層から出土した管状土錘である。一部欠損しており、全体の法量などは不明である。残存部最大長は4.5cm、直径は1.0cmを測る。重量は5.3gである。

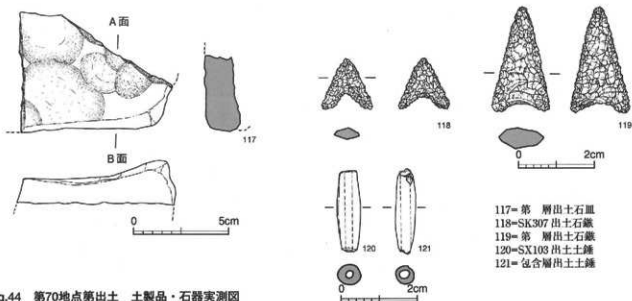


fig.44 第70地点第出土 土製品・石器実測図

(6) 金属製品

金属製品については、中世の遺構、包含層より出土した鉄製品が9点出土している。内6点は鉄釘であり、法量その他は表に記す。また鉋滓が1点出土している。

7は厚さ0.5mm前後の鉄板を整形した製品の破片で、第1遺構面を被覆する包含層より出土している。長さ4.3cm、残存重量0.9gを測る。筒状に曲げられたように見うけられ、飾り金具、連結金具、補強金具といった、何らかの製品の部品と考えられるが詳細は不明である。

8は断面がほぼ円形の径5～6mmの鉄棒を屈曲して作った環状鉄製品の残欠である。長径1.5cm～、残存重量1.4gを測る。

9はU字形鉄製鋤・鍬先であり、SK101より出土している。長さ18.4cm～、幅7.8cm～、刃部最大幅4.1cm～、装着溝の深さ1.0cm～、残存重量128.7gを測る。装着溝内部には柄の木質の残存は見られない。

10はSX104より出土した鉋滓である。平面形は不定形であるが、上面は若干凹凸があり下面は扁平な船底形になる楕円形滓である。着磁性はなく、表面は上面には褐色～暗灰色の多孔質な流動滓が付着し、下面には径～3mmの礫が多く付着している。エックス線透過観察では内部は多孔質であることがわかる。長径4.2cm、厚さ2.2cm、重量28.2gを測る。

番号	頭部形式	長さ(cm)	頭部幅(cm)	身部径(cm)	重量(g)	出土層位
1	頭巻釘	10.6	1.3	0.7	9.1	淡褐色砂質土
2	切釘	9.5	0.6	0.3	3.6	淡褐色砂質土
3	頭巻釘	4.8～	0.8	0.4	1.3	淡褐色砂質土
4	頭巻釘	3.1	0.8	0.3	0.7	淡褐色砂質土
5	?	2.8～	0.3	0.3	0.7	淡褐色砂質土
6	?	2.5～	—	0.4	0.5	淡褐色砂質土

表2 出土鉄釘計測表

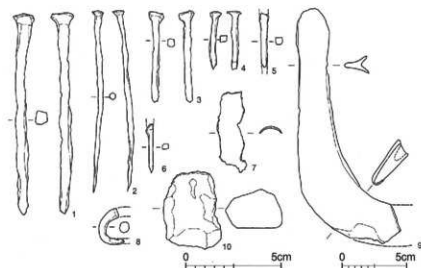


fig.45 出土金属製品実測図

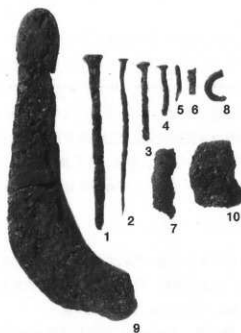


fig.46 出土金属製品



fig.47 同左X線透過像

(1 ~ 8 : 60kVp, 3mA, 40sec.
 9 : 80kVp, 3mA, 50sec.
 10 : 70kVp, 3mA, 40sec.)



fig.48 SP219・231出土 柱材

別編 月若遺跡70地点出土柱材の樹種

三村 昌史 (パレオ・ラボ)

I. 試料と方法

ここでは、C-5区のSP218、B-5区のSP219から出土した柱根各1点の計2点についての樹種同定結果を報告する。これらの柱根はピットの並びが確認されないために不確定であるが、掘立柱建物の柱根の可能性があるもので、時代は古代～中世と考えられている。同定に用いたプレバートはすでに神戸市埋蔵文化財センターにより作成済みのもので、上記出土材から横断面・放射断面・接線断面の3断面の切片を切り取りガムクロラルで封入されたものである。同定は所有の現生標本との対照に拠り、光学顕微鏡にて40～400倍で検鏡して行った。同定したプレバートはすべて神戸市埋蔵文化財センターに保管されている。

II. 結果および考察

樹種同定の結果、2点の柱根には共にコウヤマキが用いられていたことが明らかになった(表1)。同定の根拠となる材組織の特徴、および分布・材質等は次の通りである。

*コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc. コウヤマキ科 写真図版1a～1c

仮道管と放射柔組織からなる針葉樹材。樹脂道、樹脂細胞、放射仮道管はみられない。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の量は少ない。分野壁孔は窓状で1分野に1つ認められる。

コウヤマキは暖温帯に点在して分布する高木性の常緑針葉樹で、耐陰性は高く生長は遅い。材質は重さ・硬さは中庸であり、均質で加工性・割裂性は良好、水湿に強い。

No.	遺物名	出土地区	Pit	樹種
w1-8827	柱根	C-5	SP218	コウヤマキ
w1-8828	柱根	B-5	SP219	コウヤマキ

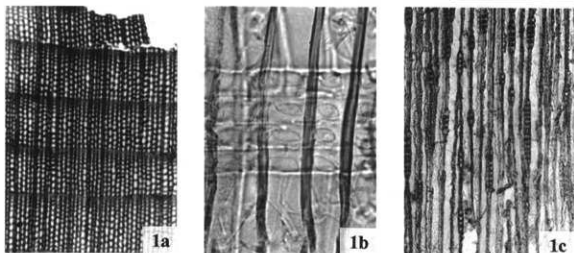


fig.49 第70地点出土柱根・材組織の光学顕微鏡写真 a: 横断面 b: 放射断面 c: 接線断面

scale bar: a-1. 0mm, b-0.5mm, c-0.4mm

1a～1c コウヤマキ (B-5区 SP219, W1-8828)

周辺の遺跡における古代～中世の時期に該当する柱材の樹種同定例は比較的行われてきており、例えば神戸市長田区の御蔵遺跡ではコウヤマキを中心にそのほかヒノキが（バリノ・サーヴェイ株式会社 2001）、神戸市灘区の深江北町遺跡ではヒノキ・ヒノキ属・クリなどを中心にそのほかコウヤマキ・イスシデ節・シャシャンボ・マツ属榎管束重属が（松葉 2002）、神戸市西区白水遺跡ではコウヤマキが（植田 1999）それぞれ見出されている。したがって、いずれも小高木～高木になり大径が得られ丈夫で腐りにくい材、特に通直な針葉樹材が選択されているようであり、なかでもコウヤマキは一般的に用いられている傾向にあるが、どの樹種が多く用いられるかは周辺植生における木材資源の問題等を反映して遺跡間で異なっている。

現在、周辺でのコウヤマキのまとまった自生地は神戸市西端に位置する丹生山の山城に限られるが、本遺跡の立地する同じ芦屋市の津知遺跡における中世の層準の花粉分析結果（辻ほか 2003）からは、背後の六甲山地にもコウヤマキがある程度生育していたことが読み取れる。したがって、本遺跡でのコウヤマキの利用は第一に周辺山城での資源量に応じたものと考えられ、中でもコウヤマキが選択されたのはその材質によるものと推察される。

引用文献

- バリノ・サーヴェイ株式会社（2001）御蔵遺跡から出土した木製品等の樹種。「御蔵遺跡 第4・6・14・3次発掘調査報告書 御菅西地区震災復興土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」神戸市教育委員会，114～128
- 松葉礼子（2002）深江北町遺跡第9次調査 出土した木製品の樹種同定。「深江北町遺跡第9次 埋蔵文化財発掘調査報告書－葦屋驛家関連遺跡の調査－」神戸市教育委員会，104～137
- 辻康男・田中義文・辻本裕也・馬場健司（2003）「芦屋市文化財調査報告第46集 津知遺跡第142地点ほか発掘調査報告書－芦屋西部第二地区震災復興土地地区画整理事業に伴う震災復興調査の成果－」芦屋市教育委員会，121～152
- 植田弥生（1999）白水遺跡第4次調査から出土した木製品の樹種。「白水遺跡第4次－神戸国際港都建設事業神戸市白水特定土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」神戸市教育委員会，66～78

第5章 まとめ

今回の調査区は、南北方向にやや長い月若遺跡の最南端部の地点にあたり、地形的には芦屋川によって形成された扇状地が芦屋川へ向かって傾斜していく傾斜変換点にあたっている。これまでの調査は、主として阪急電鉄神戸線の南側の地点を中心に実施されており、遺跡南部での本格的な調査が比較的まとまった面積で実施されたのははじめてである。調査では、弥生時代から江戸時代の遺構・遺物が検出されたが、最後にこれまでの周辺地域の調査成果をふまえ、今回の調査について時代ごとにまとめてみたい。

縄文時代 縄文時代の遺物は、遺跡の中央部付近を中心に早期・前期・中期末の遺物の出土が知られていた。今回第70地点で検出された第4・5遺構面は、遺物が出土していないため時期を特定することはできなかったが、第5遺構面は地山上面で確認された遺構面で、その層位的な関係でみると縄文時代に遡る可能性が高い遺構面ではないかと考えられる。

弥生時代 弥生時代はこれまでの調査成果と同様に、後期後半の遺構・遺物が第69・70地点で確認された。第69地点では、谷の埋没途中に土器が一括して投棄されたような状況で出土していたことから、この地点の西側にはこの時期の遺構・遺物が多数検出されるのではないかと考えられた。しかし、第70地点では予想していたよりも遺構・遺物は希薄で、この時期の遺構も第70地点の調査区の中でも北側よりで確認されていることから、この時期の集落の中心はこの地点よりも北側に広がっているものと考えられる。これ以前の時期に関しては、第70地点の第3遺構面が弥生時代中期段階に相当する遺構面の可能性が高いのではないかと推定されるが、今後の周辺地区の調査によって明らかにされるであろう。

古墳時代～
奈良時代 第69地点で遺構に伴はなかったが、土製勾玉や有孔円板などの祭司関連遺物が出土しており、これまでも指摘されていた月若遺跡における祭祀遺物の豊富さを物語る一端をうかがわせている。第70地点では、古墳時代後期から飛鳥・奈良時代の遺構・遺物が確認され、SK101からは飛鳥時代頃の土器と鉄製鍬先がまとまって出土している。今回住居跡は確認できなかったものの、この付近に該期の集落が広がっているものと判断できる。

中世 第70地点で、鎌倉時代頃の掘立柱建物4棟とその南側に堀状遺構が確認されている。堀状遺構の東側は扇状地の傾斜面になっていることから、東側の自然地形を利用して逆「コ」の字状に集落を区画する堀が存在していた可能性が考えられる。この点については、今後実施される西側部分の調査によって明らかにされると考えられる。また、西側約100mの寺田遺跡第139地点で確認された中世集落との関連もうかがわれ、中世集落のあり方を復元していく上で重要な成果といえよう。

近世 鎌倉時代以後は遺構・遺物が希薄で、次に遺構が検出される時期は近世である。第69地点で確認された石積みや第70地点の耕作痕などがある。芦屋川扇状地斜面から芦屋川までの間の土地利用が、この時期まで困難であったことを示しているものと考えられる。

結語 このように今回の調査では、これまでの調査成果を追認する部分が多かったが、縄文時代に遡る可能性のある遺構面の検出や、中世の堀状遺構を伴う可能性の高い集落の確認など、新しい知見も得ることができた。今後この周辺地域を調査するにあたり留意しておかなければならない点と考えられるとともに、今後の調査の成果が期待される。

写 真 图 版



月若遺跡遠景（東から）



月若遺跡遠景（北から）



I区全景（東から）



II区全景（西から）



I区西壁土層（東から）



I区第3遺構面全景（東から）



I区第3遺構面全景（北から）



I 区第3遺構面土器群 I・II
出土状況（北から）



I 区第3遺構面土器群 II
出土状況（北から）



I 区第3遺構面土器群 II
出土状況（東から）

I区第2遺構面全景（南東から）



I区第2遺構面全景（北から）



II区第2遺構面全景（西から）





I区第1遺構面全景（東から）



I区第1遺構面全景（北から）



I区第1遺構面全景（東から）



5

SX201出土土器



13



6



7



10



1

谷埋土内出土土器



3



12



11



8

谷裡土内出土土器



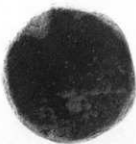
27

包含層出土双孔円盤



29

石皿



26

包含層出土土製円盤



23



24

包含層出土土鍾



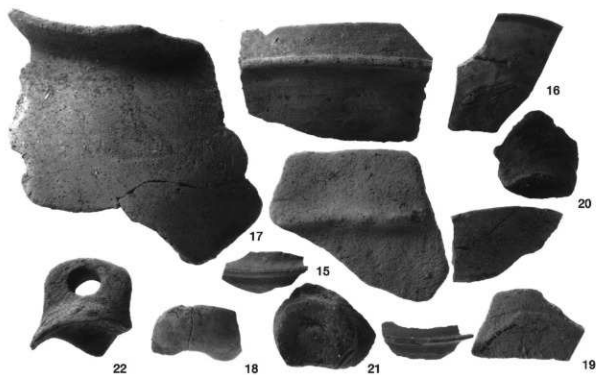
25

包含層出土土製勾玉



28

包含層出土石鏃



第1遺構面 遺構出土土器



谷埋土内出土土器



I 区第5遺構面（西地区）全景
（北西から）



II 区第5遺構面全景（南から）



III 区第5遺構面（西地区）全景
（北から）

I区第4遺構面（西地区）全景
（北西から）



II区第4遺構面全景（南から）



III区第4遺構面（西地区）全景
（北から）





I区第3遺構面全景（南西から）



II区第3遺構面全景（南から）



III区第3遺構面全景（北東から）



SD301（南から）



第2遺構面空中写真



I区第2遺構面全景（南から）



I区第2遺構面全景（南西から）



Ⅱ区第2遺構面全景（南から）



Ⅱ区第2遺構面全景（南東から）



Ⅱ区第2遺構面全景（北から）



Ⅱ区第2遺構面全景（北西から）



SD201 (南西から)



SX203 (北東から)



第1遺構面空中写真



I区第1遺構面全景（北西から）



I区第1遺構面全景（南から）



Ⅱ区第1遺構面全景（南東から）



Ⅱ区第1遺構面全景（北から）

SB101 (南東から)



SB102・130 (西から)



SB104 (西から)





SK101 (南東から)



SD101・102 (南から)



SX102 (南西から)



29



32



33



31

SX203出土土器



30



39

第2包含層出土土器



41



44



46



42

SK101出土土器



86



79



78

SD102出土土器



83

SX102出土土器



74

SD105出土土器



66

SX104出土土器



63

SP165出土土器



第1包含層出土土器



包含層出土門面硯



117

包含層出土礫石



57

SB103P 1 出土土器



76

SB105出土土器



116

SB155出土土器



114

第1包含層出土土器



第1包含層出土土器



118



115

石鏃

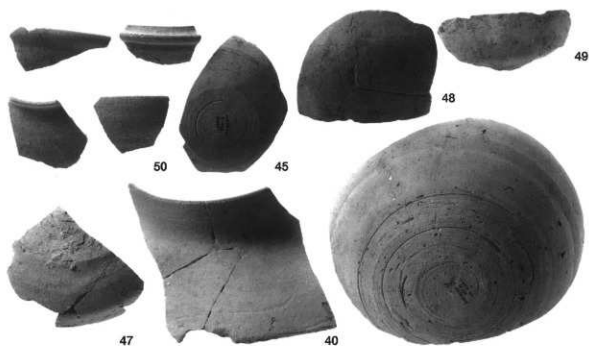


121

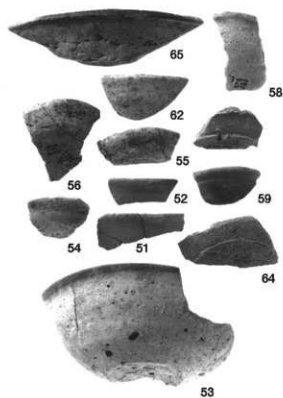


120

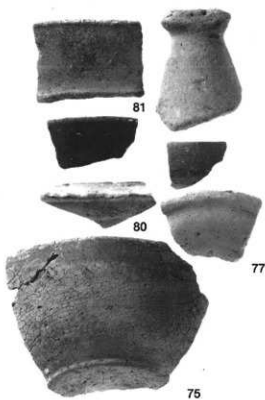
土錘



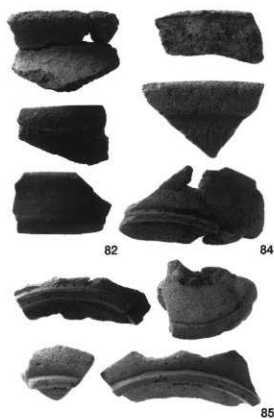
SK101出土土器



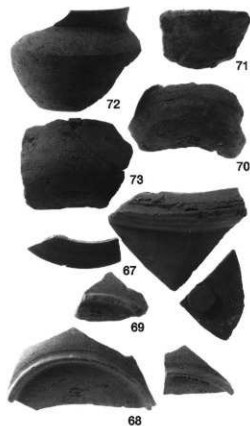
掘立柱建物・ピット出土土器



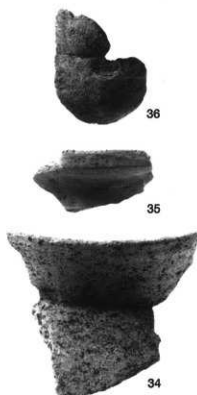
SD102・105出土土器



SX103出土土器



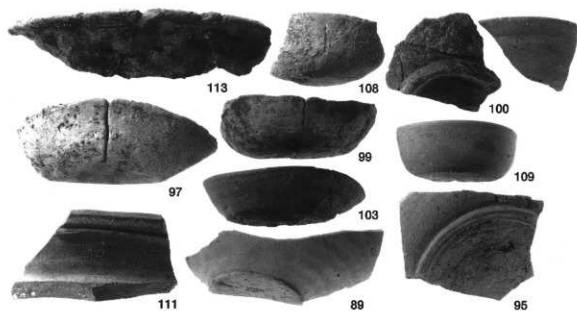
SX104出土土器



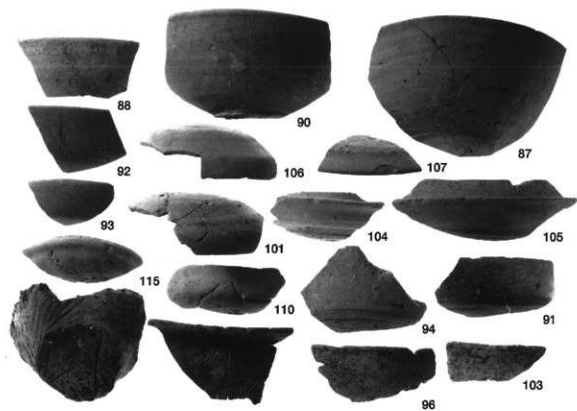
第2遺構面遺構出土土器



鉄製品



第1包含層出土土器



第1包含層出土土器

報告書抄録

ふりがな	つきわかいせきはくつちょうさほうこくしょ だい68・69・70ちてん							
書 名	月若遺跡発掘調査報告書 第68・69・70地点							
副 書 名	都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅲ							
巻 次								
シリーズ名	芦屋市文化財調査報告							
シリーズ番号	第57号							
編 著 者 名	前田佳久・石島三和・中村大介・株式会社パレオ・ラボ							
編 集 機 関	神戸市教育委員会							
所 在 地	〒650-8570 兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号 TEL078-322-6480							
発行年月日	西暦2004年3月31日							
所収遺跡名	所 在 地	コード		緯度・経度		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
月 若 遺 跡 第 6 8 地 点	兵庫県芦屋市 月若町66番7号	28206		34度	135度	20020603～20020614	122m ²	都市計画道路 山手幹線建設 に伴う事前調査
月 若 遺 跡 第 6 9 地 点	兵庫県芦屋市 月若町66番2号			43分	18分	20020614～20020726	152m ²	
寺 田 遺 跡 第 7 0 地 点	兵庫県芦屋市 月若町69番4号・70			50秒	10秒	20020729～20021029	540m ²	
所収遺跡名	種別	主な年代		主な遺構		主な遺物		特記事項
月 若 遺 跡 第 6 8 地 点	集落跡	江戸時代		溝、土坑、ピット		陶器・磁器、土師器、 須恵器		
月 若 遺 跡 第 6 9 地 点	集落跡	弥生時代 ～江戸時代		溝、土坑、ピット、 河道		弥生土器、土師器、須恵器、 陶器、磁器、土製品、双孔 円盤		遺構面を3面検出
寺 田 遺 跡 第 7 0 地 点	集落跡	弥生時代 ～鎌倉時代		竪立柱建物、溝、 土坑、ピット、 落ち込み		弥生土器、土師器、須恵器		遺構面を5面検出

芦屋市文化財調査報告 第57集

兵庫県芦屋市

月若遺跡発掘調査報告書

第68・69・70地点

—都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅲ—

2004. 3. 31

編 集

神戸市教育委員会
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL.078-322-6480

発 行

芦屋市・芦屋市教育委員会
芦屋市精道町7番6号
TEL.0797-31-9066
印 刷 株式会社 旭成社
